

## 2 外部資金による研究

### [概要]

外部資金の導入による研究の活発化については、歴博が追求している課題の一つである。競争的研究資金の一つである日本学術振興会による科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）については、2019（令和元）年度の新規採択件数は8件で、継続を含めた採択件数では36件、総額143,130千円であった（採択課題一覧参照）。

共同研究担当 柴崎茂光・三上喜孝・吉井文美

### [採択課題一覧]

	研究種目	代表者氏名	研究課題名
新 規	新学術領域 研究領域提案	松木 武彦	集団の複合化と戦争
	基盤研究（B）一般	三上 喜孝	古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開
	基盤研究（B）一般	田中 大喜	西遷・北遷東国武士の社会的権力化
	基盤研究（B）一般	横山百合子	「隠し売女」から「淫売女」へ —近世近代移行期における売春観の変容—
	基盤研究（C）一般	松尾 恒一	日本仏教と東南アジア仏教との比較研究 —政治と権力の視点を中心として—
	基盤研究（C）一般	樋口 雄彦	幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究
	基盤研究（C）一般	樋浦 郷子	帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に
	特別研究員奨励費	問芝 志保	近代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティ —東アジアとの差異化の視点から—
継 続	新学術領域 研究領域提案	藤尾慎一郎	考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明
	基盤研究（A）一般	村木 二郎	琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家
	基盤研究（A）一般	山田 康弘	考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築
	基盤研究（A）一般	坂本 稔	単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明
	基盤研究（A）一般	後藤 真	「研究に真に使える」歴史資料情報基盤の構築 —データ持続性研究と人文情報学の実践—
	基盤研究（A）一般	齋藤 努	高精度同位体比分析装置を用いた古代日本における青銅器原料の産地と採鉱状況の研究
	基盤研究（B）一般	林部 均	官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質
	基盤研究（B）一般	川村 清志	文化の主體的継承のための民俗誌の構築 —マルチメディアの活用と協働作業を通じて—
	基盤研究（B）一般	日高 薫	17～19世紀の在外日本コレクション形成に関する基礎的研究
	基盤研究（B）一般	関沢まゆみ	村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承 —葬儀変化にみる地域差の存在とその意味—
	基盤研究（B）一般	松田 睦彦	朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究 —イワシをめぐる韓国の民俗変化—

継 続	基盤研究 (B) 一般	荒木 和憲	中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化
	基盤研究 (B) 一般	小倉 慈司	史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究
	基盤研究 (B) 一般	山田 慎也	現代日本における死者儀礼のゆくえ —生者と死者の共同性の構築をめざして—
	基盤研究 (B) 一般	柴崎 茂光	林業遺産の保存と持続的な活用による林業教育・地域づくりの可能性
	基盤研究 (C) 一般	原山 浩介	1970年代～80年代の消費者運動の再編成過程に関する実証的研究
	基盤研究 (C) 一般	鈴木 卓治	博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像Web閲覧の新技术法の構築
	基盤研究 (C) 一般	大久保純一	幕末世相取材錦絵の美術史的研究
	基盤研究 (C) 一般	清武 雄二	古代日本の食材加工にみる律令国家税制の実態的研究
	基盤研究 (C) 一般	松木 武彦	古墳時代鉄鏃の変化と地域性に関する数理的解析
	基盤研究 (C) 一般	青木 隆浩	1930～1960年代における化粧文化の実態
	基盤研究 (C) 一般	荒川 章二	帝国日本と植民地災害 —日本植民地時代の台湾震災史を中心に—
	基盤研究 (C) 一般	高田 貫太	朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史
	若手研究 (A)	箱崎 真隆	東北日本における過去3400年間の酸素同位体比標準年輪曲線の確立
	若手研究	天野 真志	幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成
	若手研究	橋本 雄太	クラウドソーシングと機械学習を統合した歴史資料翻刻システムの開発
	若手研究	吉井 文美	日中戦争期華中における占領地統治の進展と現地秩序の改変過程
	特別研究員奨励費	松山由布子	説話伝承と地域文化に関する研究—東海地域における疫神信仰の形成と展開

## 【科研費研究（新規）】

### （1）新学術領域研究領域提案 集団の複合化と戦争 2019～2023年度 （研究代表者 松木武彦）

#### 1. 目的

本研究の目的は、ヒト固有の「入れ子状に階層化する多数の集団が複合した巨大な社会」が生み出されたメカニズムとプロセスを、戦争という事象を通じて解明することである。戦争には、武力による征服によって集団間の統合を促す外的・物理的側面だけではなく、戦争という状況の演出によって集団内のアイデンティティを強化し、その操作を通じて強化された権力によって急速な階層化が進むという内的・認知的側面とがある。本研究はとくに後者に力点を置き、戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化とその地域比較によって、ヒト社会における戦争と社会複合化のプロセスを復元する。さらに、ヒトの認知と身体がどのようにして戦争という現象を生み、それを媒介に、どのような認知と進化のメカニズムが、集団の複合化と、それによるヒト特有の巨大社会を実現したのかを明らかにする。

#### 2. 今年度の研究計画

戦争に関わる人工物（考古資料）を中心とした考古学的エヴィデンスを体系化し、データ群を配列したリストを作り、事象の出現の順番と因果関係を見据えつつ戦争の出現・発展・低減・消滅のプロセスを地域ごとに比較するためのフォーマットを作成することである。さらに、このフォーマットにモニュメント築造（A01班）や技術革新・芸術表現（A02班）などに関する考古学的エヴィデンスについてのデータ群を加え、領域全体で取得したデータを比較検討するための大型データ群を作成するための準備作業を行う。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

戦争に関わる人工物（考古資料）を中心とした考古学的エヴィデンスを体系化し、データ群を配列したリストを作り、事象の出現の順番と因果関係を見据えつつ戦争の出現・発展・低減・消滅のプロセスを地域ごとに比較するためのフォーマットを作成した。さらに、このフォーマットにモニュメント築造（A01班）や技術革新・芸術表現（A02班）などに関する考古学的エヴィデンスについてのデータ群を加え、領域全体で取得したデータを比較検討するための大型データ群を作成するための準備作業を行った。具体的な成果は、「文部科学省 科学研究費助成事業 新学術領域研究（研究領域提案型）2019年度～2023年度 出ユーラシアの統合の人類史—文明創出メカニズムの解明」に属する他班との有機的な協業をもとに、ウェブサイト（<http://out-of-eurasia.jp/>）で随時公開・紹介しているので、万一必要であるならば参照されたい。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎松木 武彦 本館研究部・教授  
 市川 彰 名古屋大学高等研究院（文）・特任助教  
 寺前 直人 駒澤大学文学部・教授  
 比嘉 夏子 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科・助教  
 藤澤 敦 東北大学学術資源研究公開センター・教授  
 渡部 森哉 南山大学人文学部・教授

#### 【連携研究者】

佐々木憲一 明治大学文学部・教授  
 長岡 拓也 NPO法人パシフィカ・ルネサンス代表理事

(2) 基盤研究 (B)  
 古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開  
 2019～2022年度  
 (研究代表者 三上喜孝)

1. 目的

本研究課題は、日本列島と朝鮮半島の漢字文化の展開と変容の実態を、石碑や墓誌、鐘銘や印章などの金石文を素材に考察することを目的とする。本研究課題が対象とする古代の日本列島や朝鮮半島は、中国の漢字文化が受容され、それがさらに地域社会の隅々まで浸透していく時代であった。漢字は、官僚や豪族による行政文書の作成という政治利用だけでなく、仏教・儒教などの思想や儀礼の広まりにおいても大きな役割を果たした。こうした実態を知る手がかりとしては、石や金属器に刻まれた金石文が重要な資料となるが、これまで金石文を分析する手法が韓国と日本で共有されていなかったため、その比較研究が難しかった。そこで本研究課題では、古代日本と朝鮮の金石文の比較研究の手法を開発し、さらには漢字文化とそれに付随する思想や儀礼が東アジアの各地域社会にどのように浸透していったか、その実態を金石文を通じて解明することを主眼とする。

2. 今年度の研究計画

調査カードを作成し、対象となる時期（6～11世紀）の日本と朝鮮半島の金石文についてこれまでの積文や研究を集成する。

韓国において、資料調査を行う。とくに、韓国の国立中央博物館や国立慶州博物館をはじめとする博物館所蔵の6～11世紀の金石文のうち、とくに問題となる金石文について可能な限り実見調査を行う。調査の際には韓国の研究協力者にも同行してもらい、金石文解読や調査手法の共有化をはかる。

国内（国立歴史民俗博物館や東京大学史料編纂所）で研究会を複数回開催し、積文の検討や日韓金石文資料の比較検討、さらには研究発表を行い、研究分担者の間で意見交換を行う。

3. 今年度の研究経過及び成果

【研究経過】

第1回研究会ならびに打ち合わせ 2019年5月25日（土） 於学習院大学東洋文化研究所 10:00～12:00

- ①本研究課題の目的と計画（三上）
- ②今年度の計画について（三上）
- ③研究発表

橋本繁「最近出土の韓国木簡について」

第2回研究会 2019年7月6日（土） 於国立歴史民俗博物館第二会議室 13:00～17:00

- ①研究発表  
植田喜兵成智「韓国金石文にみえる則天文字について」
- ②リニューアルした歴博・総合展示第1室〔先史・古代〕の観覧と意見交換

第3回研究会 2019年11月9日（土） 於学習院大学東洋文化研究所 13:30～17:00

- ①研究発表  
石野智大「唐代石刻題記研究の概況と実践」
- ②その他 話題提供など

【研究成果】

今年度は、研究課題についての認識の共有と、基礎資料の収集につとめた。第1回、第2回の研究会においては、おもに韓国出土の出土文字資料や金石文の資料調査に基づいた個別具体的な研究成果が報告され、意見交換をおこなうことができた。また第3回の研究会では、日韓の金石文研究の前提となる中国の金石文研究に関して、石野智大氏（明治大学兼任講師・中国史）をゲストスピーカーに招き、最新の動向と研究の実践について報告いただき、活発な意見交換がおこなわれた。

資料調査は、国内を中心におこなったが、3月末に予定していた韓国での資料調査ならびに研究会については、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、やむなく延期せざるを得なくなり、今年度は韓国での資料調査ならびに研究会を開催することができなかった。

資料収集については、韓国の古代～高麗前期までの金石文を中心に、基礎的なデータの収集と入力につとめた。

今年度の研究業績は、以下の通りである。

#### 【論文】

- ①植田 喜兵成智「黒齒常之・俊親子の事績とその墓誌の制作背景」『古代文化』70-4, pp.61-82, 2019年3月, 査読あり
- ②植田 喜兵成智「'内臣之番'으로서의 百濟-高句麗遺民-武周시기부터 玄宗開元期에 이르기까지 유민 양상과 그 변화」(日本語訳:「内臣之番」としての百濟・高句麗遺民—武周から玄宗開元期に至るまでの遺民の様相とその変化」『高句麗渤海研究』64, pp.229-259, 2019年7月, 朝鮮語, 査読あり
- ③植田喜兵成智(李在暎訳)「則天文字の発明と伝播」韓国木簡学会編『文字と古代韓国』周留城, pp.253-283, 2019年10月, 朝鮮語
- ④橋本繁「『視覚木簡』の政治性」韓国木簡学会編『文字と古代韓国1 記録と支配』, 周留城出版社, 2019年10月
- ⑤橋本繁「六世紀新羅における識字の広がり」榎本淳一ほか編『中国學術の東アジア伝播と古代日本』(アジア遊学242), 2020年1月
- ⑥堀裕「常修多羅衆成立をめぐる基礎的考察—大寺を支える僧侶組織—」(菱田哲郎・吉川真司『古代寺院史の研究』思文閣出版, pp.87-97, 2019年7月31日)
- ⑦三上喜孝「東アジア古文書の中の画指」小島道裕・田中大喜・荒木和憲:編/国立歴史民俗博物館:監修勉誠出版, pp.205-220, 2020年2月28日(査読有)
- ⑧三上喜孝「慶州・雁鴨池木簡の薬物名木簡再論 —古代東アジアの医薬文化—」『国立歴史民俗博物館研究報告』218, 国立歴史民俗博物館, pp.299-307, 2019年12月27日(査読有)
- ⑨三上喜孝「日本出土の古代文字資料—秋田県秋田城跡111次調査出土具注暦記載漆紙文書—」『木簡と文字』22, 韓国木簡学会, pp.361-371, 2019年6月(査読有), 韓国

#### 【翻訳】

- ①朴竣鎬「日本と韓国の署名・花押比較」小島道裕他編・国立歴史民俗博物館監修『古文書の様式と国際比較』勉誠出版, pp.162-180, 2020年2月
- ②文叔子「朝鮮時代における私人間の契約文書—様式と特徴を中心に」小島道裕他編・国立歴史民俗博物館監修『古文書の様式と国際比較』勉誠出版, pp.181-204, 2020年2月
- ③李在暎〔著〕, 植田喜兵成智〔訳〕「新羅の宦官官府を探して—洗宅(中事省)の性格についての再検討」三谷博・張翔・朴薫『響き合う東アジア史』東京大学出版会, pp.73-92, 2019年8月

#### 【書評等】

- ①赤羽目匡由「書評 古畑徹『渤海国とは何か』」(『メトロポリタン史学』15, 2019年12月) 近刊
- ②植田喜兵成智「紹介/明治大学広開土王碑拓本刊行委員会編『明治大学図書館蔵 高句麗広開土王碑拓本』」『歴史評論』837, pp.98-99, 2020年1月
- ③三上喜孝「書評・李成市著『闘争の場としての古代史—東アジア史のゆくえ—』」『史学雑誌』128-7, 公益財団法人 史学会, pp.30-37, 2019年7月(査読有)

#### 【学会等口頭発表】

- ①赤羽目匡由「中国皇帝のかさのもとで—渤海王の官爵利用—」(九州大学韓国研究センター定例研究会「韓国前近代の国際関係—その構図・特質への視座—」2020年2月20日, 於九州大学伊都キャンパス)
- ②橋本繁「古代朝鮮の出土文字史料と「東アジア文化圏」」唐代史研究会夏期シンポジウム, 2019年8月
- ③橋本繁「2019年日本出土木簡資料」韓国木簡学会第33回定期発表会, 2020年1月
- ④堀裕「2019年国立慶州博物館新羅学国際シンポジウム 金城の南山と平城京の東山—王都周辺の山林寺院に関する日韓比較— 日本史からのコメント」2019年8月22日 国立慶州博物館
- ⑤三上喜孝「『観世音心験記』の周辺—日本古代における観音信仰の受容をめぐって—」仙台古代史談話会, 東北大学, 2019年8月3日

## 【講演会】

- ①稲田奈津子「墓誌からみた奈良時代の社会」トンボの眼（2019年6月16日 於：品川区立中小企業センター）  
 ②植田喜兵成智「7世紀の朝鮮半島情勢—白村江の戦いから羅唐戦争へ」中央日韓協会日韓文化講座，於文芸社サロン，2020年2月20日  
 ③三上 喜孝「出羽国と古代仏教 ～列島周縁に広がる古代仏教を考える～」2019年度前期企画展「秋田城と古代仏教」講演会，秋田市立秋田城歴史資料館，2019年7月13日

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- 赤羽目匡由 首都大学東京人文科学研究科・准教授  
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授  
 植田喜兵成智 学習院大学東洋文化研究所・助教  
 橋本 繁 日本女子大学文学部・客員准教授  
 畑中 彩子 東海大学文学部・講師  
 堀 裕 東北大学文学研究科・准教授  
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授

（3）基盤研究（B）  
 西遷・北遷東国武士の社会的権力化  
 2019～2022年度  
 （研究代表者 田中 大喜）

## 1. 目的

本研究の目的は、13世紀後半～14世紀にかけて顕著になった、西遷・北遷と呼ばれる東国武士の西国や東北地域の所領への移住の実態について明らかにすることにある。東国武士は、日常的に交流してきた在来諸勢力との社会的合意を形成することによって、西遷・北遷先の所領に形成されていた地域社会を統合・編成する主体（権力）になることができた。本研究では、こうした現象を西遷・北遷東国武士の社会的権力化と捉え、東国武士の西遷・北遷という歴史事象の本質と理解し、その実態を究明する。

その際、本研究では西遷・北遷東国武士と在来諸勢力とを相互規定的な関係にあるものと捉えるため、文献資料・出土遺物・石造物・仏像等、両者の多様な諸資料を広く収集・分析し、文献史学・考古学・美術史学・民俗学・歴史地理学による総合的研究として進める。これにより、両者の社会的合意の内実を立体的に究明し、東国武士の西遷・北遷の歴史像を実証的に一新する。

## 2. 今年度の研究計画

6月中旬に国立歴史民俗博物館において研究会を開催する。研究分担者・連携研究者・研究協力者全員で、本研究の目的と今年度の調査課題を確認する。

7月から9月にかけて、宗教資料班・歴史地理班・考古班・民俗班ごとに千葉氏が西遷した肥前国小城郡域の現地調査をそれぞれ行う。また、10月から12月にかけて、同様に伊東氏が北遷した陸奥国安積郡域の現地調査を行う。

宗教資料班は、小城郡・安積郡域の中世石造物と中世仏像を悉皆調査し、金石文・胎内銘・仏像様式等から当該地域の東国武士と在来諸勢力の動向を抽出する。歴史地理班は、小城郡・安積郡域の近世地誌・地方文書と明治期地籍図を調査し、その情報をもとに現地での聞き取り調査を進める。これらにより、両地域の東国武士・在来諸勢力双方の拠点および地域開発に関わる情報を抽出する。考古班は、小城郡・安積郡域の中世城館・集落・集散地遺跡の出土遺物を悉皆調査し、当該地域の城館・集落・集散地の消長を抽出する。民俗班は、小城郡・安積郡域の近現代の生業と信仰に関する現地での聞き取り調査を実施し、当該地域の風土的特質を抽出する。そして、文献資料班は、7月から12月にかけて、『佐賀県史料集成』・『伊東市史』・『福島県史』等の刊本資料集から、小城郡・安積郡域の東国武士と在来諸勢力の動向を抽出する作業を進める。

1月から2月にかけて、各班は調査データをフォーマットに入力して整理する作業を進める。また、整理した調査データは研究代表者へ送り、集約する。

3月中旬に国立歴史民俗博物館において研究会を開催する。各班は今年度の調査成果を報告し、研究分担者・連携研究者・研究協力者全員でこれを検討して、情報の共有化を図る。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

5月に陸奥国安積郡域の現地調査に向けた事前調査を行った。7月に国立歴史民俗博物館において研究会を開催し、研究分担者・連携研究者・研究協力者全員で、本研究の目的と今年度の調査課題を確認した。9月に肥前国小城郡域の現地調査を行った。文献資料班は円通寺文書と三岳寺文書の調査・撮影、考古班は中世集落遺跡の出土遺物調査、宗教資料班は佐賀大学付属図書館所蔵の小城藩士由緒書と円明寺所蔵の仏像の調査、歴史地理班は小城市教育委員会所蔵の明治期地籍図の調査・撮影と、岩蔵地区と松尾地区での聞き取り調査および水利調査を行った。しかし、九州豪雨による洪水の影響で、当初予定していたすべての調査を実施することができなかった。また、10月に予定していた安積郡域の現地調査も、台風19号により実施できなかった。

9月に終えることができなかった小城郡域の現地調査のうち、岩蔵地区と松尾地区での聞き取り調査と水利調査については、12月と2月に追加調査を行った。そして、小城郡域の比較対象地域として、秋山氏が西遷した讃岐国高瀬郷域を選び、9月に事前調査、1月に三豊市教育委員会所蔵の明治期地籍図の調査・撮影と、聞き取り調査を行った。

9月・12月・2月に実施できた現地調査のデータは、各班でフォーマットに入力して整理を進めた。3月に国立歴史民俗博物館において研究会を開催し、研究分担者・研究協力者全員で調査データを検討して、情報の共有化を図る予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大の事態を受けて来年度へ延期した。

本研究に関わる刊行物として、『中世益田現地調査成果概報vol.3』（国立歴史民俗博物館、2020年3月31日）を刊行した。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

#### 【研究分担者】

◎田中 大喜 本館研究部・准教授  
井上 聡 東京大学史料編纂所・准教授  
貴田 潔 静岡大学人文社会科学部・准教授  
黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授  
神野 祐太 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員  
鈴木 康之 県立広島大学人間文化学部・教授  
高橋 典幸 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授  
松田 陸彦 本館研究部・准教授  
村木 二郎 本館研究部・准教授  
湯浅 治久 専修大学文学部・教授  
渡邊 浩貴 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員

#### 【連携研究者】

荒木 和憲 本館研究部・准教授  
後藤 真 本館研究部・准教授

#### 【研究協力者】

池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員  
小野 正敏 本館・名誉教授  
栗木 崇 熱海市教育委員会・学芸員  
佐々木健策 小田原市文化財課・係長  
田久保佳寛 小城市教育委員会・係長  
竹下 正博 佐賀城本丸歴史館・課長  
土山 祐之 本館・資料整理等補助員

### （4）基盤研究（B）

#### 「隠し売女」から「淫売女」へ—近世近代移行期における売春観の変容 2019～2022年度

（研究代表者 横山百合子）

#### 1. 目的

1872年発令の芸娼妓解放令は、“遊女にはその身体を所有する者がいて性を売らされている”とみる近世社会の通念が、売春は“自ら売る淫らな女”によるものとする近代の売春観に変わる起点となった。本研究では、これを近代売春観の起点となる“売春の再定義”として位置づけ、そのような転換が行われた歴史的事情を、地域社会や遊女自身の“再定義”の受け止め、および売春に対する国際社会の動向や性感染症に対応する近代医学の進展なども視野に入れて説明することを目的とする。このような考察を通して、従来一片の紙切れとされてきた解放令の歴史的立場づけを刷新すると同時に、“再定義”によって進行した、売らせる者や買う男性の不可視化、娼婦へのまなごしの変化、さらには娼婦自身が売春をステイグマとして内面化する過程を明らかにし、近世近代移行期の社会像を連続と断絶の両面から描くことを目指す。

#### 2. 今年度の研究計画

研究の具体的検討課題は、Ⅰ 国際環境と国内状況をふまえて、1872（明治5）年10月芸娼妓解放令の制定過程と歴史的意義を具体的に明らかにすること、および、Ⅱ 地域社会の実態をふまえた売春観の変容の解明の二点で

ある。研究初年度の本年は、Iの課題に向けて、(a)「売春の再定義」が行われた国内的背景を、法令の審議・制定過程や維新政権内部の勢力関係にも留意して解明する。そのため、研究代表者を中心に、井上馨関係資料(三井文庫)・岩倉関係文書(国立国会図書館蔵等)・江藤新平関係文書(佐賀県立図書館等)、太政類典・大日本外交文書等の行政資料の調査を集中的に行う。また、(b)伝染病法に反対するイギリスのフェミニズム運動など、当該期の国際的動向が、芸娼妓解放令制定過程および買売春管理制度の成立にどのように影響するのかを具体的に解明するため、分担者森田が、分担者廣川とも協力し、イギリス海軍省文書、法務官僚レベルの諸史料を中心に海外史料の収集に着手する。II「売春の再定義」による売春観の変容については、分担者廣川が中心となって、連携研究者・代表者横山とともに、地域史料の収集と整理に着手し、本格的考察に向けて史料環境の整備に努める。特に、地域社会と娼婦自身の動向を把握するうえで中心的な史料となる、東京府文書(東京都公文書館蔵)、横浜開港資料館収集史料、民事判決原本(日文研)、西田長寿収集娼妓関係資料(国立歴史民俗博物館蔵)、小新聞類(明治新聞雑誌文庫蔵)の収集のうち、明治ゼロ年代のものを中心に収集・整理・分析を進める。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

6月研究会で今年度の研究計画の具体化を協議し、2月に、ゲストスピーカーを招き小規模な公開研究会(於:専修大学)を開催した。後者では、報告1 田村俊行「イギリス性売買史研究の状況～主体性、統治、犯罪化～」で、1970年代～2010年代までの性売買史研究の状況を、主体性・統治・犯罪化という3つの論点に沿って概観し、報告2:廣川和花「明治後期～大正期日本の梅毒罹患と地域社会―栃木県塩谷郡喜連川町の事例から」で、性感染症をめぐる日本国内の地域動向について検討した。史料収集については、東京都公文書館史料が想定以上の量にのぼったこと、年度末海外調査がコロナ流行のため未実施で、予定より遅れている。

### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎横山百合子 本館研究部・教授  
 廣川 和花 専修大学文学部・准教授  
 森田 朋子 中部大学人文学部・教授

## (5) 基盤研究 (C)

日本仏教と東南アジア仏教のとの比較研究―政治と権力の視点を中心として―

2019～2021年度

(研究代表者 松尾恒一)

### 1. 目的

本研究「日本仏教と東南アジア仏教のとの比較研究―政治と権力の視点を中心として」は、日本史学・日本民俗学の研究者と、主として東南アジアを調査地域とする文化人類学研究者との共同により、大乘仏教圏の日本仏教と上座部仏教圏との比較を、国家統治のあり方、各地域で仏教と関係を結んだ民俗信仰、特に民俗神と仏教との関係等に注目して研究し、数世紀～1000年以上の仏教の歴史を有するアジア諸地域の、仏教が果たした社会的な役割と、現代社会への継承のあり方を解明することを目的とする。

### 2. 今年度の研究計画

初年度となる本年は、研究者メンバー各自が、自らがもつ研究成果とデータを共有して、調査の方向性を定める。年度内に2回開催する研究会(東京と京都でそれぞれ実施)で報告をおこない、参照点としての日本の国家仏教、中世寺社の宗教民俗的世界の妥当性を検討し、宗教―社会の関係モデルを構築する。フィールドワークとして、九州北部(大分県国東半島)で研究会を兼ねた現地調査を1回行い(3泊4日)、顕密の国家仏教的な宗教世界の枠組みの伝承の特質を考究し、より精緻化させる。東南アジア地域の、上座部仏教圏のタイ(バンコク及び、タイ東部のチャントブリ)での調査、記録を行い、その歴史性をも考究する。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

7月に第一回の共同研究会を開催し、代表松尾による問題提起としての発表「日本 大乘仏教の伝来・変容・定着: 東南アジア上座部仏教との比較の可能性」及び、各分担者による発表、片岡「タイの上座仏教と政治権力: 日本仏教との比較の可能性を視野に入れて」、中西「転宗寺院の研究」、上島「日本の顕密仏教と聖俗/僧俗」を行い、日



本・東南アジア地域の共同調査と研究会の計画について討議した。

フィールド調査として、9月にタイのアユタヤ寺院遺蹟と、アユタヤ王朝に続くトンブリー王朝と関わりの強い寺院の伽藍、及び現在に伝承される宗教活動として、東部のチャンタブリ・バンコク地域の寺院調査と、チャンタブリの福田寺の先祖供養儀礼“普度会”の調査を実施した。

国内は、古代の権門寺院の鎮護国家のための儀礼伝承として、北九州地域の寺院、東大寺修二会（お水取り）、葉師寺修二会（花会式）の調査を実施した。アユタヤ王朝時代、これに続く18世紀後期、潮州出身の華人であったタークシン王に始まるトンブリー王朝における、日本と起源を同じくするインド仏教の、転輪聖王＝仏・菩薩の資格を有する王による国家統治の思想が濃厚に見られることを確認したが、日本における村落組織の形成への影響等、地域レベルの受容のあり方の視点からの比較が、今後のさらなる課題となる。

1月以降に計画した奈良の権門寺院の共同調査、研究会が、コロナウィルス蔓延のために実施できず、次年度以降に実施する計画である。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

片岡 樹 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

中西 裕二 日本女子大学人間社会学部・教授

上島 享 京都大学文学研究科・教授

◎松尾 恒一 本館研究部・教授

### （6）基盤研究（C） 幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究 2019～2021年度 （研究代表者 樋口 雄彦）

#### 1. 目的

江戸幕府に仕えた幕臣のうち、知行地を有した旗本を事例に、維新前後の政治的・社会的動向をふまえ、武士身分の近代社会への順応のし方を明らかにする。独立した領主であることと徳川家の直臣であることが、幕府瓦解時にいかに再認識され、どちらが優先されたのかという問いが基本的なテーマとなる。具体的には、旗本領の名主をつとめ、家臣にも取り立てられた豪農の家に伝来した資料（静岡県伊豆市・飯田家文書）を素材に、伊豆国田方郡牧之郷村（現伊豆市）などに知行地を有した旗本松下家を主要な分析対象とする。幕府が倒れた後、一時的に采地への移住・土着を経験した高禄の旗本の多くが、まもなく旧幕府・徳川家の臣下を離脱し新政府直属の朝臣となることを志向した背景や、その選択を支えた家臣・領民との近世後期からの関係性、明治2年（1869）に領主の地位を喪失した後も大正・昭和期まで続いた旧領との交流のあり方などに焦点をあてる。

#### 2. 今年度の研究計画

今年度は、素材となる文書群の総体的把握と整理を進めることを目標とする。

主な研究対象とする伊豆市牧之郷・飯田家文書については、1990年代に実施された静岡県史編さん事業の過程で整理・撮影された分に関して簡易な目録が作成されているほか（撮影分の200点余については静岡県歴史文化情報センターにて公開）、近年行われた伊豆市教育委員会による書書類の調査では、画像撮影と目録化がなされている。さらに蔵書類（書籍・刊行物）に関しては、子孫が自ら整理・目録作成を実施中である。しかし、残された資料の圧倒的多数を占める近世・近現代の文書については、県史整理分を除き多くが未整理のままとなっており、まずはその全容を見極めた上で、整理・目録作成に着手する。ただし、戸長・村長・教導職・神官など飯田家の就いた公職に由来した、明治以降の戸長役場文書・村役場文書や、地方文人としての活動にもとづく和歌・俳諧等の文芸資料も多数残存していることが予想されるため、本研究の課題と直接関係しない資料については、どこまで整理を行うのかについて総量や内容を十分に確認した上で結論を出す。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

飯田家文書の整理作業（1点毎の封筒入れ、それらの文書保存箱への収納）を継続的に行うことにより、徳川幕府瓦解後の旗本土着の実態と戊辰戦争への関与、維新时期における知行所の領民との関係性、領主制解体への動向などについて、従来未整理・未公開だった文書の把握が進捗した。飯田家文書の整理には協力者1名が参加するとともに、目録入力作業には所蔵者が従事してくれている。一部の資料については撮影も行い、その画像をもとに解説

を実施し、内容面での理解をより深めることも可能となった。当該時期、すなわち幕末から明治初年の基本的な事実関係を把握する上で、幕末・明治期の当主飯田守年が書き残した日記に目を通すことができたのは、領主側と地域側との双方を見渡すために大きな助けとなった。なお、解読を進めた飯田家文書以外に、東京都公文書館などに所蔵される土着旗本に関わる文書なども参考にした上で、研究上の成果や新たな課題として確認できたのは、以下の諸点である。

- 1 知行所への土着とそこでの農兵取り立ての詳細ないきさつ、および新政府帰順時における、松下家親類である山内家を介した土佐藩の関与
- 2 近隣に土着した他の旗本らとともに「官軍」に加わり、旧幕府脱走軍と戦った箱根戦争の詳細とそれに関する諸記録の作成にいたる経緯
- 3 朝臣としての身分獲得と版籍奉還にともなう知行権喪失の過程、そして領民との葛藤や妥協、家臣団解体の諸相
- 4 家臣であるとともに知行所の有力農民であり、かつ国学の家でもあった飯田家と領主松下氏との間にみられる維新时期特有の関係性

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

### (7) 基盤研究 (C)

#### 帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に 2019～2021年度

(研究代表者 樋浦郷子)

##### 1. 目的

本研究は、植民地期の台湾や朝鮮において実施された学校儀式や学校で要請された拝礼や低頭などの儀礼の歴史に、「声」「音」という問題意識から迫るものである。「声」とは、儀式時の校歌斉唱や「沈黙」、「皇国臣民の誓詞」斉誦や「御製」の誦唱、スポーツ大会の宣誓等を想定する。「音」とは、ラジオ体操の音や号令、笛やラッパ、時鐘を想定する。実際には自分の統制のもとにあるはずの身体および精神に、他者の介入を容易にさせる媒介物として「声」「音」は重要な役割を担っている。とくに植民地の学校教育のなかにあらわれた具体的なそれらの様相をつぶさに観察することを通じ、帝国日本において就学することがどのような意味を付与するものであったのか、「帝国日本の国民」はどのように創出されようとしたのかという大きな問題に、「声」「音」を手掛かりに接近する。

##### 2. 今年度の研究計画

第一に、東アジア史の視座で考える漢文の教育を課題とする。漢文教育にあらたに関心を持つに至った理由は、音読（素読）、筆写、暗唱など、多様な身体の動きが要請されるものだからである。この点、本研究の課題として避けて通ることができないと考えた。これらは東アジアに共有されるだけでなく、植民地支配における現地の教育のありさまの特殊性を浮かび上がらせたり、教育勅語の物神化のプロセスを分析する上でも重要な示唆を与えるものと予測している。これについては、2020年度末に国際研究集会（シンポジウム）を実施し、台湾や韓国の研究者を招聘して協働的に課題に接近する予定である。第二に、当初の予定どおり「誓う」「誓わせる」という方法を用いた教育について歴史的な検討をすすめることを目標とする。これについては、2020年度と21年度、2年間をかけて行う予定である。いずれについても、2020年度および21年度の教育史学会等での発表、朝鮮史を研究する学術団体機関誌への投稿を予定する。

##### 3. 今年度の研究経過及び成果

2019年度においては、主に学校儀式・儀礼を含むものとしての運動会など、スポーツの歴史を視野に入れた研究を実施した。とりわけ、植民地・日本内地を問わず学校日誌や沿革誌など、学校保存書類のなかにあらわれる学校儀式や運動会など行事の様態に迫り、次のように公表した。

- (1) (口頭発表)「帝国日本の『学校沿革誌』—学校の儀礼に着目して—」日本台湾学会第21回学術大会 2019年6月8日。
- (2) (口頭発表)「『運動会』の展開に関する素描」近代東亞體育世界與身體：臺日體育交流 2019年8月5日。
- (3) (論文)資料紹介〈翻刻〉「『高雄第一公学校(旗津国民小学)沿革誌』—植民地期台湾の教育史—」『国立歴史民俗博物館研究報告』219, 2020年3月。
- (4) (論文)台南市新化区の学校史からみる台湾の御真影『国

立歴史民俗博物館研究報告』219, 2020年3月。

(1)(3)(4)では、『学校沿革誌』をつぶさに読むことによって、近代学校の有した普遍的特質と、地域事情に根差した特有さを、並行して把握することを目指した。(2)では、「運動会」という日本に特有の行事の歴史を紐解き、近世由来の子どもの遊びも影響していること、男女に期待されていることに顕著な差がみられることに迫った。共通した成果を挙げるとすれば、例えば関東大震災の直後に、学校はどのように行事等を変更したかということについて興味深い知見を得た。震災の直接の影響を受けた地域では、少し時間が経過すると運動会などは変わらず実施する例が見られたのに対し、遠く離れた植民地である台湾の公学校(台湾人対象初等教育機関)では、「戊申證書」奉読式も含めて学校の空気がいっそう厳粛なものとなり、運動会の名称や規模に変化が見られたのである。この点は、植民地の学校の特徴を示すものとして今後も慎重に検討する予定である。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎樋浦 郷子 本館研究部・教授

### (8) 特別研究員奨励費

#### 近代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティ—東アジアとの差異化の観点から—

2019～2021年度

(研究代表者 問芝志保)

#### 1. 目的

本研究は、先祖祭祀研究と文化ナショナリズム研究とを架橋し、「日本は近代的な〈他者との出会い〉のなかで、先祖祭祀を核とする宗教文化的ナショナルアイデンティティをどのように形成し、現実へと反映させてきたのか」を明らかにすることを目的としている。研究代表者はこれまで、19世紀末以来の初期グローバル化のなか、西洋化・文明化の受容やそれへの対抗で揺れ動く日本が、〈あるべき日本の先祖祭祀と墓制〉を創造し、「先祖を祀る民族」というアイデンティティを獲得したことに注目し、その具体相を明らかにしてきた。本研究はその成果を引き継ぎつつ、近代日本がアジアへ向けた視線や、それがもたらした実質的な影響をふまえながら、アジアという〈他者との差異化〉の観点からもたらされた、先祖祭祀と墓制の再編の問題を解明することを目指すものである。

この目的のため、①明治初期の神葬祭政策下で形成された墓地観・墓観、②明治中期～大正初期頃における啓蒙主義的・開明派知識人におけるアジア葬送文化に対する評価(単にアジアの祖先崇拜や葬送墓制習俗を軽視・蔑視するのではなく、称賛・尊敬していた可能性も含めて検討)、③特に台湾を事例とし、台湾の墓制に対する日本側の評価と介入、という3つの段階的テーマを設けて分析を進める。

#### 2. 今年度の研究計画

上記テーマ①のなかでも、近世末期～明治20年頃までの間における神葬祭墓地をめぐる思想や言説について、主に国内の図書館や資料館を活用して資料収集を行い、その内容の分析を行う。それらの内容をもとに、時期および地域により分類し、分類ごとに特徴を明らかにする。また、現存する神葬祭墓地での実地調査も行う(京都市・名古屋市・津市)。以上の成果については次年度初頭までに補足的調査・分析を行い、得られた成果を論文として投稿し、また国内学会・研究会での口頭発表で公表する予定である。

また、テーマ②の「日本国内におけるアジア葬送文化についての認識」に関しても、主に国内の図書館や資料館における資料収集と検討に着手する。またテーマ③についても、台湾において、2年目以降の現地での資料収集・調査をスムーズに行うための予備調査を行う。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

テーマ①については、まず近世末期の資料を15点程度蒐集し、その内容を分析した。その結果、この時代には各藩・各学派のなかで、それぞれの立場から葬祭式が整えられ、そのなかの一部において墓制についても検討が行われていることがわかった。本研究のテーマにとって興味深い点は、朱子『家礼』で示された墓制のなかで日本の風土や習俗に適合しない部分をどのように処理するかについて、各派がいかに異なる対応をとっているかであり、この問題については次年度以降もさらに検討を深めていきたい。さらに明治期以降の資料についても10冊程度を蒐集し検討したところ、明治初年～10年代は、(1)神葬祭推進準備期(明治元年～4年)、(2)神葬祭推進期(明治5年～8年4月頃)、(3)神葬祭推進の中止～墓地埋葬行政の世俗化期(明治8年4月頃～17年)の3期に分け

られることが判明した。以上の内容については次年度の国内学会・研究会での口頭発表で公表する予定である。

なお③については、新型コロナウイルス流行のため、2～3月に予定していた調査が行えなかった。次年度の見直しはまだ不透明であるが、まずは日本国内において台湾の葬送墓制に関わる文献を蒐集し、日本統治期に「旧慣」とみなされた台湾在来の葬送墓制がどのようなものであるか、またどのように描写され、位置づけられているかについての分析を進める予定である。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎問芝 志保 本館研究部・外来研究員

### 【科研費研究（継続）】

#### （9）新学術領域研究領域提案

考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明

2018～2022年度

（研究代表者 藤尾慎一郎）

##### 1. 目的

AMS一炭素14年代測定によって相対年代から数値年代への転換が進む高精度な較正暦年代に基づいた弥生時代研究と、DNA解析が急速に進んでいる分子人類学との異分野研究によって、数値年代にもとづくDNAのあり方が復元できる。その成果は、弥生～古墳時代の親族構造や通婚圏、人口増加率などを得るために有益な情報となる。

特に九州北部に分布する弥生時代の甕棺出土人骨から採取したDNAと、同人骨の炭素14年代測定によって得られた死亡年代を比較して、数十年単位の高精度な時間軸に基づいたDNAを導きだし、墓に葬られた人びとの親族構造を解明する。

また、現代日本人のゲノムに12%程度みられる縄文由来のDNAの意味を考えると、古墳時代以降も列島外からのDNAが加わる必要性が想定されているため、日本列島へ人類が渡ってくる経路地である朝鮮半島南部から出土する三国時代を中心とした古人骨のDNAと年代・同位体比分析を行って、古墳時代人骨と比較する。

##### 2. 今年度の調査

2019年度に調査したのは以下の遺跡である。

4月18日 香川県高松茶臼山古墳人骨追加調査 香川県埋蔵文化財センター、藤尾、坂本、篠田謙一（A02班研究代表者）

4月22日 大阪府野々井二本木山古墳出土人骨 大阪府文化財調査事務所、清家、藤尾、篠田

5月15日 韓国慶尚北道高霊郡池山洞44号墳出土人骨 慶北大学校博物館 藤尾、篠田、高田貫太（歴博）

5月27日 福岡県栗山遺跡第5次調査出土弥生人骨、福岡市博多遺跡群第203次調査出土弥生人骨 九州大学大学院比較社会文化研究院 藤尾、篠田

6月10日 鹿児島・宮崎県内出土先史時代人骨 鹿児島女子短期大学 藤尾、篠田

6月12日 岡山県内出土古墳時代人骨 岡山理科大学 清家、藤尾、篠田

6月13日 倉敷市中津貝塚出土縄文人骨 倉敷市埋蔵文化財センター 清家、藤尾、篠田

6月24日 愛知県朝日遺跡出土人骨 愛知県埋蔵文化財センター 藤尾、篠田

8月20日 鳥取県内古墳出土人骨 鳥取県埋蔵文化財センター 濱田、藤尾、篠田

8月21日 米子市日下古墳群出土人骨 米子市埋蔵文化財センター 濱田、藤尾、篠田

8月22日 鳥取県大山町原古墳群出土人骨 大山町教育委員会 濱田、篠田

9月10日 韓国慶尚北道氷川郡完山洞古墳群出土人骨 東亜大学校博物館 藤尾、坂本

10月7～8日 熊本大学医学部所蔵先史時代人骨 熊本大学医学部 木下、藤尾、坂本、瀧上、篠田、角田恒雄（A02班研究分担者）

11月5～6日 沖縄県出土貝塚時代人骨、貝殻 浦添市教育委員会、北谷町教育委員会、読谷村教育委員会、恩納村博物館、本部町立博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄県立埋蔵文化財調査センター、沖縄国際大学

2月12～14日 慶尚北道大邱達城坪村里遺跡出土青銅器時代人骨 慶尚北道文化財研究院 藤尾、篠田、キム・ドヨン（慶北大学校考古人類学科）

### 3. 今年度の研究経過及び成果

#### ① 縄文時代

岡山県中津貝塚、鹿児島県出水貝塚、同柁原貝塚出土人骨の調査を行った。中津貝塚出土人骨は縄文後期の中津式に比定された人骨で、炭素14年代測定の結果、縄文晩期前半の較正年代が得られている。後期に比定されている出水貝塚出土人骨は九州南部における最古の縄文人骨として知られていて、今回3点を測定したところ、縄文後期の較正年代が得られた。また柁原遺跡出土人骨1点を測定し、縄文後期の年代を得ることができた。いずれも九州南部初の縄文人のミトコンドリアDNAの事例である。

#### ② 弥生時代

愛知県朝日遺跡、鳥取県古市宮ノ谷山遺跡、島根県猪目洞窟遺跡、福岡県博多遺跡群、同栗山遺跡F区、佐賀県大友遺跡出土人骨の調査を行った。

佐賀県唐津市大友遺跡は、弥生早期から中期、および古墳初期にかけての埋葬遺跡で、支石墓や甕棺墓等から多量の人骨が出土している。1999年に九州大学が発掘調査した人骨の年代測定が行われたが、最大限の海洋リザーバー効果の影響を見込んで較正年代が補正されていたので、瀧上舞と坂本稔が再補正に取り組んだ。炭素14年代や炭素・窒素同位体比などの測定値は報告書に掲載されているデータをそのまま利用した〔三原ほか2003〕。その結果、歴博が土器付着炭化物を試料に行った測定結果と整合的な結果を得ることができた。なお、DNA調査については篠田謙一が九州大学比較文化研究院の舟橋京子氏（A04班公募研究代表者）から弥生早期に比定されている支石墓に埋葬されていた8号支石墓出土人骨の側頭骨の提供を受けて行い、形質学的調査で指摘されていた縄文系弥生人であることを核DNAで確認している。

福岡県朝倉市栗山遺跡第5次調査で出土した弥生中期前半の甕棺内で見つかった人骨と、福岡市博多遺跡群で出土した弥生中期前半の甕棺内で見つかった人骨の調査を行った。2018年度に行った弥生中期末の甕棺内で見つかった福岡県那珂川市安徳台遺跡の調査に続く、成人甕棺出土人骨の調査である。栗山遺跡は3点の試料を預かったうち、14号と22号の2点の年代を得ることができた。予備的なミトコンドリアDNA分析では3点とも成果を得ることができた。博多遺跡群の資料は来年度測定予定である。

弥生時代の甕棺出土人骨の年代測定は、九州大学の田中良之氏らの先駆的研究があるが〔田中ほか2003, 田中2011〕、発表媒体の性格上、すべてのデータや解析方法が掲載されていないため、関係者に問合せた。しかし、対応していただけなかったため、今回の研究に活かすことはできなかった。研究史的な重要な研究であるのに残念である。

愛知県朝日遺跡は本プロジェクトではもっとも東にある弥生時代の遺跡で、弥生前期の遠賀川系土器が分布する東限の遺跡として、どのようなDNAをもつ人びとが暮らしていたのか、きわめて興味深い資料である。人骨は出土状況から弥生時代と推定されているものの、古墳時代に属する可能性も否定できないということで、時期決定に地元の期待が高かった資料である。ただ炭素14年代用試料として預かった四肢骨片や肋骨片はすべて遺存状況が悪く、コラーゲンが遺っていない。よってDNA用の試料とした側頭骨2点のうち、13号人骨の炭素14年代と同位体比を測定した。その結果、伊勢湾沿岸地域で水田稲作が始まる弥生時代前期後半に相当する較正年代を得た。人骨が出土した地点は、この地域で最古の弥生遺跡である貝殻山貝塚の南に隣接しているため、弥生前期の可能性は否定できない。なお予備的なDNA分析で3体のミトコンドリアDNAのタイプが決定され、すべて渡来系弥生人であることがわかっている。

島根県猪目洞窟遺跡から出土した3点の人骨のうち、弥生中期の年代を示したのは1体で、弥生中期初頭～後半の較正年代を得た。2018年度に調査した鳥取県古市宮ノ谷山遺跡出土のモモ核は、補足調査を行い、昨年同様の結果を得ている。

#### ③ 古墳時代

昨年度に引きつづき高松茶臼山古墳出土人骨の補足調査、弥生終末の桃核が出土した鳥取県古市宮ノ谷遺跡の追跡調査、大阪府野々井二本木山古墳、岡山県内の5世紀を中心とした古墳（岡山理科大学保管、岡山大学保管）、宮崎県内の地下式横穴横穴墓から出土した人骨（鹿児島女子短期大学保管）、鹿児島県鹿屋市の古墳時代の地下式横穴墓出土人骨の年代測定を行った。

もっとも古いのは3世紀に比定されている高松茶臼山古墳人骨である。後円部第1主体部東部の人骨の年代測定を行ったところ、第1主体部西部の人骨と同じ炭素14年代を得ることができた。追葬のない同じ堅穴式石室に埋葬されている以上、当然の結果であるが、偶然に同じ時に亡くなったのか、何らかの理由でほぼ同時に亡くなったのか、不明である。

大阪府野々井二本木古墳は舟形石棺を持つ古墳前期末～中期初頭の古墳であるが、炭素14年代測定用にお預かりした四肢骨はコラーゲンの回収率が低かったため、炭素14年代測定を行うことはできなかった。なおDNA分析用

に預かった歯からは、ミトコンドリアDNAを得ることができた。

岡山大学保管人骨(岡山市飯盛山東1号墳,倉敷市勝負砂古墳,総社市狩谷5・6号墳),岡山理科大学保管人骨(津山市久米三成4号墳,高梁市赤羽根古墳群)は,1600~1700<sup>14</sup>C BP台の炭素14年代が出ている。なお,赤磐市中島1号墳群出土人骨を3点,お預かりしたが,コラーゲンの回収量が不足していたため,炭素14年代測定を行うことはできなかった。なお,岡山県内の古墳から見つかった人骨のDNA分析の結果は,2021年度に刊行予定の国立歴史民俗博物館研究報告2019年度活動報告(2)に掲載予定である。

宮崎県西都市の前原地下式横穴墓群,えびの市島内地下式横穴墓群から出土した人骨の炭素14年代測定を行った。宮崎県でも内陸の地下式横穴墓の年代は鉄鏃で考古学的に行われてきたが,炭素14年代により改めて年代を検討した。島内地下式横穴墓群出土人骨3体の調査を行ったところ,148号人骨のみ1530±20<sup>14</sup>C BP,6世紀中ごろから7世紀前半の較正年代(1s)の値を得ることができたが,ほかの2体はコラーゲンの回収量が不足していたため同位体比分析が出来ないこともあり,炭素14年代も参考値にとどまっている。

なお前原地下式横穴墓群出土人骨はコラーゲンの回収量が不足しており測定できなかった。

鹿児島県鹿屋市に所在する古墳時代の地下式横穴墓群出土人骨である立小野堀遺跡2体と町田堀遺跡1体の調査を行った。いずれも5世紀代に比定されているが,炭素14年代もそれを裏づける年代であった。詳細は国立歴史民俗博物館研究報告第228集2019年度活動報告(1)に掲載予定である。

#### ④ 韓国三国時代

慶尚北道高霊の王墓である慶北高霊池山洞群44号墳出土人骨と,慶北完山洞古墳出土人骨の年代測定とミトコンドリアDNA分析を行った。池山洞44号墳出土人骨は歯から年代測定を行うことにしたが,コラーゲン不足で炭素14年代を出すことはできなかった。側頭骨を資料にしたミトコンドリアDNA分析は,2019年度活動報告(1)に収録している。完山洞古墳は全部で11体の人骨を預かった。3体が1つの群を成す箱式石棺を2群,サンプリングし,親族構造を解明するのが目的である。2020年度に年代測定を行い,2020年度活動報告に報告予定である。

⑤ 鹿児島女子短期大学が保管している鹿児島県種子島,徳之島,喜界島,与論島,沖永良部島など,薩南・奄美群島から出土した人骨のなかには,正式な発掘調査をへて貝塚時代や中世などの時期の詳細がわかっているものと,洞窟出土人骨で年代のわかっていないものがあるため,後者については炭素14年代測定を行った上,先史時代に比定された人骨のみDNAの調査を行うことにして,2019年度は炭素14年代の測定を行った。

九州南部型弥生人と豊富な貝製品を持つ人びととして研究史的に有名な種子島広田遺跡2015年度調査の南区から出土した2号墓人骨1体の炭素14年代測定を行ったところ,古墳時代後期併行という結果であった。しかし,コラーゲンの回収率が低いということで,参考値という扱いである。ただ出土状況からみると考古学的には広田遺跡でもっとも古い弥生終末~古墳時代に比定されている資料であることからしても,コラーゲンの回収率が低いことが原因で新しく出過ぎている可能性がある。

同じく種子島に所在する田之脇遺跡と小浜遺跡の調査を行った。田之脇遺跡は弥生以前と考えられていた遺跡だが,炭素14年代は弥生中期以前の年代であった。小浜遺跡は中世の遺跡として知られていたが,古墳時代に属する広田の人骨のDNAが,その後の種子島でどのように変化するのかを知るために測定候補に加えた遺跡である。年代学的調査,およびDNAとも2020年度活動報告に掲載予定である。

縄文時代併行とされている貝塚時代に比定された徳之島に所在する面縄第1貝塚,同下原洞穴遺跡,貝塚前V期併行のトマチン遺跡の調査を行った。炭素14年代測定の結果,それぞれ弥生早期・前期併行,弥生前期併行,縄文後期後葉併行であることが明らかになった。

徳之島ヨンマイ洞遺跡,喜界島花良治地区岩陰,与論島赤崎鍾乳洞は,いずれも時期が不明の人骨が多数得られていた遺跡である。先史時代の遺跡であれば今後,調査を行う必要があるということで年代測定を行ったところ,いずれも古代~中・近世の人骨であることがわかったので,DNA分析は行わなかった。

#### ⑥ 沖縄貝塚前期・後期時代の貝殻集積の貝と人骨の補足調査を行った。

2018年度の調査で補足調査の必要性が生じた貝殻集積の補足調査と,沖縄でもっとも古い貝殻集積と考えられている久米島大原貝塚A地点などの調査を行った。このうち貝殻集積出土貝の年代測定結果を2020年度活動報告に報告予定である。

#### 参考文献

- 田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom Higham 2003:「弥生人骨を用いたAMS年代測定(予察)」九州考古学会・嶺南考古学会第6回合同考古学大会『日・韓交流の考古学』pp.245-251
- 田中良之 2011:「AMS年代測定法の考古学の適用に関する諸問題」『AMS年代と考古学』pp.131-162,学生社
- 三原正三・宮本一夫・中村俊夫・小池裕子 2003:「名古屋大学タンデロン加速器質量分析計による大友遺跡出

土人骨の<sup>14</sup>C年代測定」『佐賀県大友遺跡Ⅱ—弥生墓地の発掘調査—』pp.64-69, 考古学資料集30, 九州大学考古学研究室

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

##### 【研究分担者】

木下 尚子	熊本大学・教授	奄美・沖縄出土人骨の考古学的解析
清家 章	岡山大学・教授	古墳時代人骨の考古学的解析
◎藤尾慎一郎	本館研究部・教授	研究総括, 弥生時代人骨の考古学的解析
山田 康弘	本館研究部・教授	縄文時代人骨の考古学的解析
濱田 竜彦	鳥取県地域づくり推進部文化財局鳥取弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室 係長	中国地方の先史時代人骨

##### 【連携研究協力者】

坂本 稔	本館研究部・教授	炭素14年代測定
瀧上 舞	本館研究部・プロジェクト研究員	食性分析・年代測定

#### 5. 刊行物

2019年3月に刊行された国立歴史民俗博物館研究報告第219集に2018年度活動報告21本を報告している。

##### 考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明—2018年度の調査—

.....藤尾慎一郎・木下尚子・坂本稔・瀧上舞・篠田謙一	119
大阪府東大阪市山賀遺跡第5次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査 .....	藤尾・坂本・瀧上 139
鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生中・後期人骨の年代学的調査 .....	濱田竜彦・坂本・瀧上 147
鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤秀明・角田恒雄・安達登 163
鳥取県米子市古市宮ノ谷山遺跡出土の弥生後期土器に伴うモモ核の年代学的調査 .....	濱田・坂本 179
福岡県那珂川市安德台遺跡出土弥生中期人骨の年代学的調査 .....	藤尾・坂本・瀧上 189
福岡県那珂川市安德台遺跡出土弥生中期人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤・角田・安達 199
香川県高松市高松茶臼山古墳出土古墳前期人骨の年代学的調査 .....	清家章・坂本・瀧上 211
香川県高松市高松茶臼山古墳出土古墳前期人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤・角田・安達 221
鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨等の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 231
鹿児島県宝島大池B遺跡出土貝塚前期人骨の形質人類学的調査 .....	.....竹中正巳・峰和治・設楽博己・春成秀爾 243
鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤・角田・安達 257
沖縄県伊是名村具志川島遺跡群出土貝塚前期人骨の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 265
—岩立遺跡, 岩立遺跡西区—	
沖縄県伊江島具志原貝塚出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 273
沖縄県読谷村所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積と人骨等の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 277
—浜屋原貝塚B, 大久保原遺跡, 中川原遺跡, 片江原遺跡, 大当原貝塚A地点, 木綿原遺跡—	
沖縄県読谷村出土貝塚時代人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤・角田・安達・土肥直美 295
—木綿原遺跡・大当原遺跡—	
沖縄県うるま市所在遺跡出土貝塚時代の人骨と貝殻集積の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 301
—具志川グスク崖下地区遺跡, 平敷屋トウバル遺跡, 宇堅貝塚, 津堅貝塚—	
沖縄県北谷町所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 313
—伊礼原遺跡・伊礼原D遺跡・小堀原遺跡—	
沖縄県北谷町出土貝塚後期人骨のDNA分析 .....	篠田・神澤・角田・安達・土肥 321
—伊礼原D遺跡・平安山原A遺跡—	
沖縄県宜野湾市新成下原第二遺跡出土の貝殻集積の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 327
沖縄県浦添市所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査 .....	木下・坂本・瀧上 333
—嘉門貝塚B・嘉門貝塚A—	

(10) 基盤研究 (A)  
 琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家  
 2018～2021年度  
 (研究代表者 村木二郎)

1. 目的

世界史上の大航海時代より以前に、早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、諸外国と複雑な外交交渉をおこない、積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で、言語も習俗も異なる宮古・八重山や奄美に侵攻し、在地社会を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本研究では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝國的側面に新たに視点を据え、中世後半の東アジア海域世界の多様かつ流動的な様態を捉え直す。その際、これまで独擅場であった文献史学による研究に目を配りながらも、集落構造や流通、技術に着目し、考古学、民俗学、分析化学等のさまざまな手法により、新たな歴史像を探る。そして、歴史的一断面から設定された現在の国境の必然性を問うことで、「国家」とは何かを歴史学の立場から提言するための実証的素材を整える。

2. 今年度の研究計画

本研究は、琉球の周辺地域から古琉球史を見つめなおすことを目的とする。そのためには、周辺地域の資料を渉猟する必要がある。これまでの当該研究は、主として文献史料をもとに描かれてきたが、既存の文献史料を素材とする限り、従来の研究から脱却することは難しい。というも、奄美・先島を中心とした琉球周辺地域には同時代の文献史料がほとんど存在しないため、後世の琉球王府による編纂物に頼るしかなく、結果として琉球王府史観によって周辺地域を捉えざるを得ないのである。しかし、それらの地域には遺跡があり、遺物がある。これらの考古資料を整理、分析することで、新たな素材を増やし、周辺地域独自の文化を明らかにする基礎作業が重要となる。

第2年度である2019年度は、沖縄本島うるま市勝連城跡出土陶磁器調査を実施して、データの蓄積を図る。手法としては、特定の遺跡(遺構)出土の貿易陶磁器を、同一分類基準で全点カウントする。沖縄独自の分類基準ではなく、全国的に通用する基準を用いることで、当該地域以外の情報とも比較可能とする。また、中世の集落遺跡、港および墓地を踏査する。宮古島市上比屋山遺跡については、来年度以降の発掘調査も視野に入れ、既存の測量図をもとに調査地点を確定したい。

また、2020年度に国立歴史民俗博物館で企画展示をおこない研究成果報告の場を設けることとする。そのため、展示を念頭に置いて、研究メンバー全体での研究会を開催する。

3. 今年度の研究経過及び成果

5月31日～6月2日 調査 於：宮古島市上比屋山遺跡  
 上比屋山遺跡踏査

6月9日～12日 調査 於：うるま市教育委員会  
 うるま市勝連城跡出土陶磁器調査

6月24日 研究会 於：国立歴史民俗博物館  
 報告：村木二郎「中世・琉球の海(仮)展示案」

関連資料調査：荒木和憲・村木二郎「冊封使船送迎之図」「又吉真三収集琉球拓本コレクション」ほか

9月1日～2日 調査 於：福岡市教育委員会  
 博多遺跡群出土陶磁器調査、発掘調査現場見学

10月25日～28日 調査 於：八重山  
 波照間島・西表島・竹富島集落遺跡踏査

11月22日～24日 調査 於：宮古島市上比屋山遺跡  
 上比屋山遺跡踏査、測量図修正

11月27日～28日 調査 於：沖縄県立博物館・美術館  
 梵鐘調査、那覇港踏査

12月4日～6日 調査 於：西都市教育委員会  
 都於郡城跡出土陶磁器調査

12月10日～12日 調査 於：韓国国立民俗博物館



## 日韓交流史調査

1月17日～20日 調査・研究会・シンポジウム 於：沖縄県立博物館・美術館

うるま市勝連城跡出土陶磁器調査

報告：山本 正昭「与論城跡模型について」

シンポジウム「遺跡から見た琉球列島のグスク時代」

報告：村木 二郎「島々からみた「琉球帝国」」

池田 榮史「奄美における「グスク時代」」

久貝 弥嗣「宮古地方におけるグスク時代の展開」

小野 正敏「八重山のグスク時代—集落遺跡からの視線—」

天久～那覇港踏査

2月16日～19日 調査 於：うるま市教育委員会

うるま市勝連城跡出土陶磁器調査

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

## 【研究分担者】

池田 榮史 琉球大学国際地域創造学部・教授

黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授

小出麻友美 千葉県立中央博物館・研究員

鈴木 康之 県立広島大学人間文化学部・教授

関 周一 宮崎大学教育文化学部・教授

中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授

渡辺 美季 東京大学大学院総合文化研究科・准教授

荒木 和憲 本館研究部・准教授

齋藤 努 本館研究部・教授

田中 大喜 本館研究部・准教授

松田 陸彦 本館研究部・准教授

◎村木 二郎 本館研究部・准教授

## 【連携研究者】

岡本 弘道 県立広島大学人間文化学部・准教授

## 【研究協力者】

池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員

小野 正敏 本館・名誉教授

久貝 弥嗣 宮古島市教育委員会・主事

佐々木健策 小田原市文化財課・係長

## (11) 基盤研究 (A)

考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築  
2018～2021年度

(研究代表者 山田康弘)

## 1. 目的

研究代表者である山田らが科研費を受けて行ってきた研究によって、これまで40年間にもわたって唱えられてきた「抜歯仮説」をはじめ従来の「人骨出土資料に基づく縄文社会論」には、人骨相互の帰属年代が異なり同一の墓域・埋葬小群を構成していなかったなど、分析の前提に大きな問題があり、そのままでは議論できないことが明らかとなった。この問題を解決するためには、人骨出土事例の考古学的・人類学的・年代的・文化財科学的な再検討が必須である。そこで本研究では、過去に出土した縄文人骨に対して新規に炭素・窒素同位体分析および年代測定を行い、年代補正をし、その帰属年代を正しく把握する。あわせてストロンチウムの同位体分析とDNA分析を行い、人骨の出自や人骨間の遺伝的關係をおさえた上で考古学的な再検討を加え、考古学・人類学（含む同位体・ゲノム領域）・年代学を総合した新領域であるBio-Archaeologyの見地から、新たな縄文社会論を再構成し、あわせて学際的研究のコラボレーションモデルを提示する。

## 2. 今年度の研究計画

上記の目的を達成するために令和元（2019）年度（2年目）では、以下の作業を行う。

- ・岡山県彦崎貝塚および岩手県蝦島貝塚出土人骨を対象とし、サンプリングを行う。
- ・これらの資料の年代測定、同位体分析を実施する。
- ・上記の分析結果をうけて、考古学的な埋葬属性との関連性について検討を加える。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

岡山県彦崎貝塚出土資料については、必要な年代測定および同位体分析については測定を終了することができ、あとはDNAの検討のみが残されている状況である。また、昨年度来伊川津貝塚出土人骨の核DNAについては、サンプリングを行った5体より抽出に成功し、その中でも残存率の高い3体について現在PCRによる増幅を行っているところである。

また、縄文時代文化研究会と合同でシンポジウム「縄文時代墓制の現段階」を12月7・8日に日本大学百年記念館にて開催し、のべ300人以上の参加者があった。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

### 【研究分担者・考古学班】

◎山田 康弘	本館研究部・教授	全体総括・墓制の分析
設楽 博己	東京大学大学院・教授	墓制の分析
山崎 健	奈良文化財研究所・主任研究員	年代比較資料としての動物遺存体の分析
石丸恵利子	広島大学総合博物館・研究員	年代比較資料としての動物遺存体の分析

### 【研究分担者・人類学班（含む同位体分析・ゲノム領域・年代学）】

水嶋崇一郎	聖マリアンナ医科大学・助手	人骨形質の検討
五十嵐由里子	日本大学・講師	妊娠痕等による人口・年齢構造の分析
谷畑 美帆	明治大学	古病理学的観点からの分析
米田 穰	東京大学総合研究博物館・教授	人骨の年代測定、安定同位体比による縄文人の食性の分析
坂本 稔	本館研究部・教授	人骨の年代測定
工藤雄一郎	学習院女子大学・准教授	人骨の年代測定
日下宗一郎	東海大学・准教授	安定同位体比による縄文人の食性の分析、ストロンチウム同位体による移動の分析
太田 博樹	東京大学大学院・教授	DNAによる出土人骨間の血縁関係の分析
覚張 隆史	金沢大学・助教	DNAによる出土人骨間の血縁関係の分析、ストロンチウム同位体による移動の分析
齋藤 努	本館研究部・教授	ストロンチウム同位体による移動の分析

### 【研究協力者・考古学班】

長田 友也	中部大学・非常勤講師	副葬品・呪術具関係の分析
川添 和暁	愛知県埋文センター	着装装身具の分析
増山 禎之	田原市教育委員会	渥美半島における人骨出土遺跡の分析
田嶋 正憲	岡山市教育委員会	瀬戸内における人骨出土遺跡の分析

### 【連携研究者・人類学班（含む同位体分析・ゲノム領域・年代学）】

近藤 修	東京大学大学院 准教授	人骨形質の検討
------	-------------	---------

## (12) 基盤研究（A）

### 単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明

2018～2021年度

（研究代表者 坂本稔）

### 1. 目的

放射性炭素年代法は、炭素14（<sup>14</sup>C）の半減期に基づく年代測定法であり、考古学や地球惑星科学などの諸分野で広く利用されている。測定値（炭素14濃度）から数値年代を得るにはIntCalなどの「較正曲線」を用いるが、そ

のデータは5年分解能であり欧米産樹木から得られたものである。較正曲線の改善は年代測定の精度・確度の向上に直結することから、全世界的に研究が進められている。申請者らはその過程で、日本産樹木の炭素14濃度がIntCalとずれる年代があることを見出した。国産試料の年代測定において、このようなずれは年代値の誤差を生むことにつながり、より正確な年代決定のための較正曲線が必要である。本研究は人類の歴史に重要な過去2000年間について、IntCalの解像度を上回る1年分解能の較正曲線の確立を目的とする。このような較正曲線が得られれば、年代測定の精度が画期的に改善するだけでなく、<sup>14</sup>Cを指標とした太陽物理などの自然科学分野にも影響を与える。

## 2. 今年度の研究計画

国立歴史民俗博物館年代実験室における試料調製の体制が整い、年輪セルロースの抽出が効率用に行えるようになった。引き続き、日本産樹木年輪の単年輪炭素14年代測定を進める。測定費用の制約から隔年の測定を基本とし、必要に応じて測定を補完する。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

宮城県仙台市中在家南遺跡の隣接地で出土したケヤキ（AD2～130）と、三重県津市の専修寺で用いられたヒノキ材（AD1158～1436）の隔年の単年輪炭素14年代測定を行った。前者は歴博の先行研究で測定され、IntCalからずれる炭素14年代を示した箱根埋没スギ（244BC～AD188, 5年輪）と飯田埋没ヒノキ（AD52～542, 5年輪）の時期と重なる。仙台ケヤキは箱根スギと近い挙動を示す一方で、飯田ヒノキとは若干挙動が異なっていた。ただし先行研究は5年輪を1試料とした測定であり、特に飯田ヒノキについては単年輪の再測定を視座におく。一方、後者は先行研究で測定された京都府宇治市平等院鳳凰堂ヒノキ材（AD1017～1177, 5年輪）、兵庫県姫路市の円教寺ケヤキ材（AD1410～1520, 5年輪）および2018年度に測定した福井県坂井市の丸岡城ケヤキ材（AD1462～1553）と接続する。

本研究と並行して実施中の人間文化研究機構ネットワーク型機関研究プロジェクト（北東アジア地域研究推進事業）「自然環境と文化・文明の構造」により、鹿児島県鹿屋市白水B遺跡出土のセンダン（1049～927BC）の測定を実施できた。本研究が対象とする過去2000年間以前の資料だが、弥生開始期を議論するのに必要なデータであり、今後必要に応じて測定の充実を図る。

酸素同位体比年輪年代法により、韓国南部の遺跡で出土した木材の年代が決まりつつある。今年度は釜山広域市古村里遺跡出土のノグルミ（AD80～200）の年輪セルロースを抽出・分割した。所蔵機関および測定を予定する韓国地質調査所との調整を行った上で、2020年度中の測定を予定する。

2018年度測定した丸岡城ケヤキ材の成果は、天守の築造年代ならびに酸素同位体比年輪年代法の成果とともに、文化財科学会第36回大会で報告した。また、データの提供を行った次期較正曲線「IntCal20」は査読を通過し、2020年度中にも公表の見込みである。

2020年度には長野県大桑村池口寺ヒノキ材や伊那谷埋没ヒノキなどを用い、歴博の先行研究で未測定の8～9世紀の測定を実施する。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎坂本 稔 本館研究部・教授
- 箱崎 真隆 本館研究部・特任助教
- 木村 勝彦 福島大学・共生システム理工学部・教授
- 三宅 美沙 名古屋大学・宇宙地球環境研究所・准教授
- 中尾 七重 山形大学・理学部・研究員
- 尾崎 大真 東京大学・総合研究博物館・特任研究員

(13) 基盤研究 (A)  
 「研究に真に使える」歴史資料情報基盤の構築  
 —データ持続性研究と人文情報学の実践—  
 2017～2020年度  
 (研究代表者 後藤真)

1. 目的

本研究の目的は歴史資料情報基盤を「研究で真に使える」ものにするべく、研究を行うものである。情報基盤としてRDF・IIIF・TEIという3つの標準を用い、目録・画像・テキストそれぞれについて、国際標準でかつ実用に耐えうるシステム構築を行う。歴史学研究および関連研究に資することから始まり、広く過去を扱った教育などに展開し、大学などだけではなく各地域の博物館や在野の歴史研究者でも活用可能とする。技術として標準化されたものを重点的に用いるのは、歴史研究の方法論を反映し、かつ複数機関で相互運用し、教育などへのアウトプットまでを実際に行うという、実践のための研究であることを本研究の最大の意義である。また、歴博の資料を国際標準規格で公開することで、進んでいない博物館資料の公開へのモデルケースともなる。

実際には目録・画像・テキストが複雑にリンクを構成し、必要な情報に容易にアクセスできるようにするものである。また、これらの情報にはすべてURIを付し、研究資源として論文等の成果リポジトリとの連携を行う。

2. 今年度の研究計画

資料そのものの特徴分析や日本前近代資料の特徴へとの可能性を拓きつつ検討を行う。デジタルデータのしくみと実際の方法論の差異といった、「そもそもうまくいかない点」にこそ、資料分析の本質があると考え、情報基盤から資料の本質分析へとつなげる。あわせて、研究チームによる「機関を超えた情報提供」を可能にする研究を行う。複数機関における、複数のサーバにこれまで蓄積されたデータを「一体的なモノ」として効果的に表現できるのかなどを確認する。国際標準規格上の機能についても、歴史教材等での活用を介し、より実践で使える機能構築を検討する。

延喜式等のデータを活用した目録と画像・テキストの総合的なデータ構築を可能にするためのシステム構築を検討する。これにより、テキスト・目録・画像の三つの枠組みを構築することが可能になり、歴史資料データを研究に高度に使うための大枠が完成する。あわせて、昨年度の重要な成果であるGetty研究所との連携を活かし、特にLinked Dataを中心とする目録情報の国際的な共通化等を行う仕組みを確保する。

また、歴史学の基礎的な手法等を見直すことにより、なぜデータ活用がうまくいかないのかなどの分析を行うことで、より利用可能なデータの構築と蓄積を行うことを目指す。研究計画の後半に入り、より歴史資料研究に利用可能なデータのあり方を総合的に研究するとともに、実際の多様なデータの構築を行う。とりわけ、コンテンツ情報の利用と、横断型検索の課題等も含めて広く検討を進めた。

3. 今年度の研究経過及び成果

IIIFにかかわるデジタル・アーカイブシステムを構築し、公開した。前年度までに構築していたIIIFのシステムは相互運用性等を確保するという観点からの成果を上げていた。しかし、一方で人文系の研究者など、情報技術の専門ではないユーザからの閲覧という観点からは、そもそもIIIFのビューアのみでは決して快適ではないという課題があった。IIIFとRDFおよびTEIの連携という観点において、まずはこれを解決すべきと考え、閲覧を容易にするとともに、目録に加え画像にもランディングページを作成することで、両者の連携についても容易なものとした。また、歴史資料の活用の際に課題となっている、データ粒度の問題の一つも、この成果により道筋をつけることができたと考える。この一点ごとの「デジタルアーカイブ」と、関連したシステムの組み合わせにより、さまざまなニーズの研究者に対応するための、データプラットフォーム構築のためのシステム設計への着想も、あわせて得ることができた。

メタデータの検討に関しても、既存の有力なデジタルアーカイブシステムの検討をベースにした、集中的な検証を実施した。融通の利くデータ構造と、特に情報系の研究者にとって利活用可能なしくみのバランスを考え、あらたなしくみの可能性について検討を行った。具体的にはSchema.orgのしくみを基本とし、これ以外のメタデータを組み合わせるといった手法を検討することが、現実的な解決方法であると考えた。

また、TEIについても検証の終了を終え、実装への準備を整えた。これらの研究成果については、DH2019などの国際会議で発表を行い、国内外へと広く公開した。

平成29年度～令和2年度

人文

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎後藤 真 本館研究部・准教授  
 岡田 義広 九州大学附属図書館・教授  
 坂本 稔 本館研究部・教授  
 関野 樹 国際日本文化研究センター・教授  
 高田 良宏 金沢大学総合メディア基盤センター・准教授  
 山田 太造 東京大学史料編纂所・助教  
 内田 順子 本館研究部・准教授

### (14) 基盤研究（A）

高精度同位体比分析装置を用いた古代日本における青銅器原料の  
 産地と採鉱状況の研究  
 2017～2020年度  
 （研究代表者 齋藤努）

#### 1. 目的

わが国は、古墳時代後期から古代にかけて、海外の関与を受けつつも日本独自の国家体制が成立していき、やがて変容・崩壊の過程をたどる。その影響は多方面の文化や技術に反映され、青銅器原料の産地や採鉱技術にも及んでいる。

本研究では、青銅器原料の産地を推定する主な手段であった鉛の同位体比分析に加え、きわめて高精度な新規分析装置を使用して、銅や、鉱山周辺地質のストロンチウムやネオジムの同位体比分析も行う。この手法はマルチアイソトープ法とよばれており、それにより、（1）古墳時代後期における青銅器の日本産原料の開始時期とその地域を解明すること、（2）古代において青銅器原料を供給した鉱山を特定しその推移を明らかにすること、（3）古代に採掘された銅の鉱石種別を判定し日本における採鉱の状況を究明すること、以上の三課題に取り組むことを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

これまでの鉛同位体比研究から、古代の青銅製品には、山口県内から採取された原料が主として使用されていたことがわかっている。古代にさかのぼる複数の鉱山から採掘される鉱石の鉛同位体比は、歴博が2014年以前に所有していた比較的精度の低い装置では識別が困難であったが、現有の高精度の分析装置によってみ分けられるようになり、長登鉱山産の原料が主に使われていると推定された。

山口県の周防鑄銭司跡から、羽口・るつぼのほか、長年大宝5点が出土したので、その鉛同位体比を分析し、原料の産地を推定する。経験上、羽口やるつぼの付着熔融物は鉛の濃度が低いため、歴博が従来行ってきた高周波加熱分離法では鉛同位体比分析ができなかった。しかし、抽出クロマトグラフィー用レジンを使用することで、多量の試料を効率よく前処理できるようになったので、これらの資料にも適用することにした。

周防鑄銭司跡からは、承和昌宝の破片も出土したため、X線CT撮影と鉛同位体比分析を実施する。周防鑄銭司以前に銭貨を鑄造し、和同開珎の破片や羽口・るつぼなどが出土している長門鑄銭所の新規資料も分析を開始する。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

昨年度中に試料採取した、周防鑄銭司跡出土の羽口・るつぼ付着熔融物と長年大宝について、鉛同位体比分析を行った。同県内鉱山の鉱石の数値と比較し、長登鉱山産原料が使用されていると推定された。また、X線CTの観察結果や銭貨の数値に誤差の範囲を超えるばらつきがみられることから、5点の長年大宝は、同時に鑄造されたのではなく、完形にならずに取り置いていたものが、重なった状態で出土したものと推測された。

長登鉱山出土木簡から墨書文字を読み取った結果、古代の銅生産は、資材面でも人材面でも官民の共存を前提として成立していたと結論づけられた。

長登鉱山産の鉱石と、周防鑄銭司跡出土の羽口・るつぼ付着熔融物とでは、鉛同位体比にわずかな差異があり、鉱床の中での数値のばらつきや、鉱石以外の要因が加わっている可能性が考えられた。これを検証するため、同鉱

山の周辺地質資料や羽口・るつぼなどのストロンチウム同位体比測定を行った。

高防鋳銭司跡出土承和昌宝と長門鋳銭所出土資料の分析については、新型コロナウイルスの影響により、研究会や資料の受け渡しができなくなったため、年度内の実施には至らなかった。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

成瀬 正和	東北芸術工科大学文化財保存修復センター・客員教授
田中 晋作	山口大学文学部・教授
今岡 照喜	山口大学理学部・名誉教授
亀田 修一	岡山理科大学生物地球学部・教授
高橋 照彦	大阪大学文学部・教授
古尾谷知浩	名古屋大学文学研究科・教授
澤田 秀実	くらしき作陽大学音楽学部・准教授
竹内 亮	花園大学文学部・専任講師
坂本 稔	本館研究部・教授
高田 貫太	本館研究部・准教授
荒木 和憲	本館研究部・准教授
林部 均	本館研究部・教授
◎齋藤 努	本館研究部・教授

### (15) 基盤研究 (B) 官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質 2018～2020年度 (研究代表者 林部均)

#### 1. 目的

古代日本は、その境域である東（東北地方）と西（九州地方）に居住する人々を「蝦夷」、「隼人」などと呼称し、特別なシステムで統治した。国家の境域が地勢・政治・経済の上でも、列島中央とは異なる特別な地域と認識されていたからである。また、近年、境域におかれた官衙が政治的な拠点であるとともに、国家の外の地域との交流（外交・交易・軍事）拠点であったことが明らかとなっている。そこで、本研究では、このような官衙の交流拠点としての機能を具体的かつ実証的に分析し、古代日本の境域のもつ特質や、この地域が古代日本の歴史的展開に与えた影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、遺跡や遺構・遺物の分析により、交流拠点としての官衙の実態把握と、その機能の復元、出土文字資料の再検討などから地域社会の復元をおこなう。そして、境域という新しい視点からみた、古代史像の構築を目指す。

#### 2. 今年度の研究計画

昨年度に引き続き、古代日本の境域における官衙の最新の発掘調査にもとづき、遺跡を構成する建物や空間の機能、その変遷を可能なかぎり復元し、その動態を明らかにする。その際、官衙のもつ交流拠点としての機能である外交、交易、軍事という視点をとくに意識して、それを反映する具体的な遺構・遺物・史料の把握に努める。

この作業を古代国家の東では、1. 秋田平野（秋田城）とその周辺、2. 横手盆地とその周辺、古代国家の西では、3. 福岡平野（大宰府）とその周辺、4. 大島畠田遺跡と都城盆地、5. 日向国府跡（西都市）とその周辺、と5つの地域を設定して、官衙遺跡の様相とその周辺遺跡の動態、他地域との交流の把握につとめ、古代日本の境域のもつ特質の検討をおこなう。個々の地域の詳細な資料調査は、各研究分担者・研究協力者がおこない、その分析や歴史的な背景の検討は、全体で共同研究会を実施して検討する（研究会を巡検も含めて3回予定）。

昨年度の研究では、2. の横手盆地と4. の都城盆地が、古代国家の境域の中での位置づけが類似しているのではないかという成果が得られた。そこで、今年度はとくに、この二つの地域に焦点を絞り、官衙のような居館の出現や集落の動態、外の地域との交流の様相について、具体的に分析し、境域のもつ特徴を抽出したい。

また、1. の秋田城では、北海道のとくに石狩低地帯との交流が明らかとなった。そこで、東北地方北部の須恵器や、鉄製品などの石狩低地帯への搬入の実態の把握につとめ、この二つの地域の交流が何にもとづくものなのか、秋田城の変遷とかわるのか、石狩低地帯という地域社会がいかに変容したのかについて分析する。

古代国家は北海道に対して擦文文化の成立を促すなど大きな影響を与えている。さらにその北にひろがるオホー

ツク文化とのかかわりについても、古代国家にかかわる遺物、たとえば須恵器、帯金具、銭貨などの搬入や堅穴住居の変化などを分析して、古代国家が地域社会をいかに変容させたのかについて、具体的に検討したい。

さらに、同じことは、九州南部から南の島々においても発生したはずである。その見通しを今年度の中に明らかにし、その指標を抽出したい。3. の大宰府では、九州や南の島々から様々な物資が集められていた。その実態について具体的な考古学の資料、文献史学からの史料や出土文字資料の両面からデータを集める。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、古代日本の境界領域における官衙等の最新の発掘調査の成果にもとづきつつ、官衙のもつ交流拠点として機能である外交・交易・軍事に着目して、遺跡・遺構・遺物の分析をおこなった。

本研究では、古代国家の東では、1. 秋田平野（秋田城）、2. 横手盆地、古代国家の西では、3. 大宰府、4. 都城盆地、5. 日向国府と、5つ地域に着目して、境界領域の特徴を把握しようと考えた。

今年度は、この中でも、とくに古代国家の東である1・2の地域について調査を実施した。1の秋田城跡の変遷を把握するとともに、2の雄勝城の横手盆地の中での移動の問題を検討した。そのうえで、昨年度の調査で、その一端が明らかとなっていた秋田産の須恵器が北海道の石狩低地帯に集中的に搬入されていることを調査し、どのような時期にどのような目的で搬入されているのか、その様相に秋田城、雄勝城がいかにかかわるのかを具体的な資料調査をおこないつつ、交流に視点を置いて検討を加えた。また、秋田産の須恵器が北海道の東端、根室半島でも出土していることを確認した。さらに、古代国家と擦文文化、オホーツク文化 とのかかわりを調査した。とくに知床半島のシャシコツ岬上遺跡において、皇朝十二銭の「神功開寶」がオホーツク文化の土器と一緒に出土していることを調査・確認した。7～8世紀前後における続縄文文化から擦文文化への劇的な変化、擦文文化の拡散、オホーツク文化への影響を検討した。

古代国家の南では、それほど調査を進めることはできなかったが、奄美群島の調査ができ、境界領域の特徴について、中世までも含めて検討した。古代の兼久式土器、貝製品を調査した。

今年度は、横手盆地において、巡検・研究会をもつことができた。年度末に秋田から搬入された須恵器の研究を中心に札幌において研究会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止を余儀なくされた。

なお、研究会・資料調査等の開催は下記のとおり。

- |            |        |  |
|------------|--------|--|
| 4月18日・19日  | 資料調査   | 秋田市秋田城跡歴史資料館                             |
| 5月22日～26日  | 資料調査   | 別海町加賀家文書館・根室市歴史と自然の資料館、厚岸郷土館、釧路市立博物館     |
| 7月3日～6日    | 資料調査   | 標津町立歴史民俗資料館、羅臼郷土資料館、知床博物館、モヨロ貝塚館         |
| 7月24日～27日  | 資料調査   | 江別市郷土資料館、北海道立埋蔵文化財センター、余市水産博物館、恵庭市郷土資料館  |
| 8月27日～30日  | 資料調査   | 紋別市立博物館、オホーツクミュージアムえさし、稚内市樺太記念館、稚内市北方記念館 |
| 9月3日・4日    | 資料調査   | 市立函館博物館                                  |
| 10月1日～3日   | 資料調査   | 北上市博物館、遠野市立博物館、花巻市立博物館                   |
| 10月19日・20日 | 資料調査   | 東北歴史博物館、登米市立歴史博物館                        |
| 11月1日・2日   | 第4回研究会 | 横手市教育委員会                                 |
| 11月8日～10日  | 資料調査   | 知床博物館                                    |
| 12月6日～8日   | 資料調査   | 北海道大学、北海道博物館                             |
| 12月19日～22日 | 資料調査   | 沖縄県立博物館、首里城                              |
| 2月22日・23日  | 資料調査   | 大仙市教育委員会                                 |
| 3月3日～5日    | 資料調査   | 奄美市立奄美博物館、奄美市歴史民俗資料館                     |
| 3月27日・28日  | 第5回研究会 | 北海道大学（新型コロナウイルス感染症拡大のため中止）               |

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎林部 均 本館研究部・教授

#### 【研究分担者】

- 三上 喜孝 本館研究部・教授  
 高田 貫太 本館研究部・准教授  
 菱田 哲郎 京都府立大学文学部

栞畑 光博 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター（都城市教育委員会）  
 坂上 康俊 九州大学人文科学研究院  
 蓑島 栄紀 北海道大学アイヌ・先住民研究センター  
 鈴木 琢也 北海道博物館・学芸主査

【研究協力者】

伊藤 武士 秋田市秋田城跡歴史資料館  
 島田 祐悦 横手市教育委員会  
 吉野 武 宮城県教育庁文化財課  
 杉原 敏之 福岡県教育庁教育総務部文化財保護課  
 津曲 大祐 西都市教育委員会  
 永山 修一 ラ・サール高等学校  
 近沢 恒典 都城市教育委員会

(16) 基盤研究 (B)  
 文化の主体的継承のための民俗誌の構築—マルチメディアの活用と協働作業を通じて  
 2018～2022年度  
 (研究代表者 川村清志)

1. 目的

本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。

この研究の意義として、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。民俗誌は、対象とする社会の生活文化を全体的に記録することを目的としている。本研究では、日本の地域社会において研究者と現地の人びとの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な—メディアを通じて文化実践を上書できる—記録の構築を目指す。

2. 今年度の研究計画

2019年度は、昨年度のサーベイ調査と研究分担者からの示唆を検討し、各調査地における協働調査の具体的な活動を中心とした計画を立てた。

まず、調査先進地域である能登輪島市では、夏祭りのフォトエスノグラフィーの作成に向けての調査と現地での協働作業を遂行を予定した。地元七浦公民館とのコラボレーションとして、『七浦から世界へ—調査・研究・活用の拠点としてのフィールド』と題したシンポジウムを行う。この企画は、30年前に調査地で行ったフィールドワークを振り返りつつ、民俗誌の意味を問い直し、現在の生活文化に活かす方途を模索するものであり、文字起こしを行い、校正を経て次年度内にブックレットとして出版する予定である。同地域については地域の青年会との協働作業に基づき、地域の過疎化と空洞化を活写するために、地元を離れた青年会員たちの日常実践の参与観察と映像記録化のため、石川県金沢市や富山県、さらに三重県での調査を開始する。また、宮城県七ヶ浜町では、地域の婦人会や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに震災以後の文化復興に関するビジュアル民俗誌の制作の協働作業に入ることになる。

他方で本年度から宮城県気仙沼地域と沖縄県宮古島地域でのフィールドワークを本格的に開始する。気仙沼地域では、地元の元教委員会に勤務し、文化財の審議委員も務めた方をキーパーソンとして、夏と秋にインタビューと参与観察を行うことになる。また、彼を通じて気仙沼市の文化財行政とその保存活動の代表的な実践事例である二つの民俗芸能(早稲谷鹿踊と波板虎舞)の参与観察を開始する。沖縄県宮古島については、秋から冬季にかけて、キーパーソンとなる地元の郷土史家のインタビューを行うとともに、彼が中心となって組織する地域文化研究会と祭礼行事の記録活動の参与観察を行い、その一部の映像記録化を行う予定である。



### 3. 今年度の研究経過及び成果

全体的な計画としては、おおむね順調に進展している。以前から調査をしていた地域では、先行的に現地との協働作業が行われたことで、具体的な成果の一端を継続して示しつつある。これらの先行地域での成果を基礎としながら、他地域においても同様のコラボレーション体制を構築することができた。

まず、先行的な調査地として石川県輪島市において、これまでの調査を礎として当該地域で行われる夏祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』のための調査と現地での協働作業を継続していく。文字通り祭りの当日に関するフォトエスノグラフィーを、地元の青年会とそのOBとの協働作業によって遂行する。また、過疎化による地域の空洞化が進む今日の状況を活写するために、地域を離れた青年会員たちの映像民俗誌の作成を彼らの協力のもとに開始した。この青年会との協働作業に加えて、地元の七浦公民館活動に参加する人たちとの活動が具体化しつつある。その具体的な成果として、2019年11月16日には、公民館にてシンポジウム『七浦から世界へ』を開催することができた。

同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の婦人会や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに震災以後の文化復興に関するビジュアル民俗誌の制作のための予備的な調査を開始した。

また、昨年から本格的に調査を開始した宮城県気仙沼地域と沖縄県宮古島では、地元での協働作業を遂行しうるキーパーソンを確定し、具体的な調査を開始することができた。気仙沼では地域の文化の継承と展開について営みについて、宮古島では島の伝統文化の継承を課題とした営みについて、各々のキーパーソンを交えながらの調査の方向性を確定した。なお、調査地で得られた資料や映像データの保存・記録作業については、次年度から本格的に開始する予定である。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎川村 清志 本館研究部・准教授
- 岡田 浩樹 神戸大学・国際文化学研究所・教授
- 内田 順子 本館研究部・准教授
- 柴崎 茂光 本館研究部・准教授

## (17) 基盤研究（B）

### 17～19世紀の在外日本コレクション形成に関する基礎的研究

2017～2020年度

（研究代表者 日高薫）

#### 1. 目的

17世紀以降のヨーロッパで形成された日本コレクションは、未知の世界である東方へ向けた眼差しを反映する異文化コレクションのひとつとして位置づけられるが、その歴史的展開は未だ全体的には把握されていない。本研究では、王侯貴族による啓蒙主義的な性格のコレクションから近代的なコレクションへの変化が認められる19世紀の状況とくに注目し、具体的な事例の比較検討を通じて、各時代における日本コレクション形成の動向をたどる。博覧会や博物館展示との関連、貿易や産業振興といった実利的な側面にも留意しつつ、ジャポニスム前夜の日本美術受容の実態を解明し、海外における異文化コレクションをめぐる文化の総体的理解の一助としたい。

なお、本研究は、歴博が推進する人間文化研究機構・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用「ヨーロッパにおける19世紀日本関連資料の調査と活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築にむけて—」と連動しつつ、19世紀のコレクション研究に新たな理論的裏付けを与える基礎的な研究を推進するものである。

#### 2. 今年度の研究計画

基幹研究プロジェクトにおいては、ウィーン世界博物館所蔵のハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションの総合的調査を中心に、シーボルトの二人の息子、アレクサンダーとハインリッヒに関する「もの資料」および文献資料の調査を進めている。本年度は、引き続き現地調査をすすめるとともに、ドイツおよびオーストリアにおいて調査研究をふまえた国際連携展示および国際シンポジウム等を開催し、19世紀の在外日本関係資料に関わる最新の研究成果を広く発信することとした。

- ① 海外コレクションの調査（関連分野のメンバーによる） ドイツ国内の小シーボルト・コレクションの調査、

ロイトリンゲン大学所蔵ベルツ・コレクション染織資料の調査、ウィーン応用美術博物館などの調査を進める。

- ② 文献資料研究 小シーボルト関連文献資料を収集し、翻刻・翻訳などを進める。
- ③ 国際連携企画展示の準備と開催 ミュンヘン五大陸博物館およびウィーン世界博物館において開催予定のシーボルト・コレクションに関する企画展示のための調査研究を進め、展示を完成させる。
- ④ 国際研究集会等の開催 上記企画展示に関連して、国際シンポジウムを開催する。
- ⑤ 関連資料の収集と整理 万国博覧会および日本コレクション関連の資料（書籍・論文・原史料・写真等）を収集する。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

- ① ドイツを中心に各地に散在するシーボルトの息子たち（アレクサンダーとハインリッヒ）の収集資料の調査（ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家、ヴェルツブルクシーボルト博物館、ウィーン世界博物館）、およびロイトリンゲン大学が所蔵するベルツ・コレクションの染織品の調査をおこない、あわせてコレクションに関連する文献資料を収集した。調査成果の一部は国立歴史民俗博物館のデータベース上で公開した。
- ② 国際連携企画展示「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten」（邦題：「日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国」）の開催

会場：ミュンヘン五大陸博物館 会期：2019年10月11日～2020年4月26日予定、3月14日から臨時休館、5月12日に再開し9月13日まで延長 主催：ミュンヘン五大陸博物館、国立歴史民俗博物館 プログラム・パートナー：ミュンヘン・フォルクスホッフシュー、ミュンヘン独日協会 メディア・パートナー：歴史雑誌「ゲシヒテ」 協力：バイエルン州科学芸術省、五大陸博物館友の会

ドイツ有数の全国紙、Süddeutsche Zeitung紙（南ドイツ新聞、2019年11月20日）で大きくとり上げられるなど、好評を博した。刊行物は以下の通り。

・展示ハンドブック『Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten』（ブルーノ・リヒツフェルト編著、Museum Fünf Kontinente発行、独語版および英語版）

・子ども向けブックレット『Mit Konti und Sakura in Japan』（Museum Fünf Kontinente発行）

・展示ハンドブック日本語版『日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国』（青柳正俊訳、国立歴史民俗博物館発行）

- ③ 日澳友好150周年企画Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold展（邦題：「明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から」）の開催  
会場：ウィーン世界博物館 会期：2020年2月20日～5月12日予定、3月11日より臨時休館、7月2日に再開し8月11日まで延長 主催：ウィーン世界博物館、国立歴史民俗博物館、人間文化研究機構機関研究プロジェクト、公立はこだて未来大学 協力：世界博物館友の会  
Kronen Zeitung紙（クローネン・ツァイトゥンク、2020年2月14日）、Der Standard紙（スタンダード、2020年2月26日、3月2日）紙、Kurier紙（クーリール、2020年2月13日）、Kleine Zeitung紙（クライネ・ツァイトゥンク、2020年3月4日）、ORF 2（オーストリア放送協会、2020年2月11日）、Rádio DEVÍN（スロヴァキアラジオ局、2020年5月12日）など現地主要メディアにおいて大きくとりあげられ、好評を博した。刊行物は以下の通り。

・展示ハンドブック（無料配布）『Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold』（Kunsthistorisches Museum発行、国立歴史民俗博物館協力、ドイツ語版および英語版）

- ④ ミュンヘンにおける国際研究集会「International Conference: Exhibiting "Japan" Overseas（邦題：国際研究集会「海外で《日本》を展示すること」）」（日時：2020年3月13日 10:00-16:30、会場：ミュンヘン五大陸博物館）の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大により延期した。
- ⑤ ウィーン世界博物館における国際シンポジウム「International Symposium: More Insights into the Heinrich von Siebold Collection（邦題：国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」）」（日時：2020年3月9日・10日 会場：ウィーン世界博物館・フォーラム）」の開催を予定し、予稿集を刊行したが、新型コロナウイルス感染拡大により延期した。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

荒川 正明 学習院大学・文学部	青柳 正俊 本館研究部・プロジェクト研究員
大久保純一 本館研究部・教授	澤田 和人 本館研究部・准教授

島津 美子 本館研究部・准教授      ◎日高 薫 本館研究部・教授  
 福岡万里子 本館研究部・准教授

(18) 基盤研究 (B)  
 村落社会の相互扶助の動揺と民俗の維持継承  
 —葬儀変化にみる地域差の存在とその意味—  
 2017～2019年度  
 (研究代表者 関沢まゆみ)

1. 目的

高度経済成長期以降の経済や社会の大きな変化の延長線上で2000年以降、地域社会の相互扶助のあり方に大きな動揺がみられる。とくに葬儀の自宅葬からホール葬へ、家族葬へ、そして香典の辞退などの変化(葬儀の縮小化)にそれが顕著である。しかし、生業や伝統行事も含めた実際の民俗学の調査現場では、そのような社会関係の変化にも対応の地域差を見出すことができる。村の相互扶助の代表的な場が葬儀であったが、それが揺らいでいる現状を把握するとともに、それが村の伝統的な民俗行事の伝承に影響を与えているのか否か、その点を各地の事例より分析していく。本研究では、(1)ホール葬・家族葬と地域社会の実態、(2)葬式の相互扶助という社会関係の変化と地域の伝統行事などにみられる文化的結集力についての調査分析から、生活変化と伝承維持の力学関係を明らかにすることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

葬儀の変化と村落の伝統的な民俗行事の伝承の変化との関連を具体的に把握するための調査を研究分担者および研究協力者各位で継続する。3月に現代民俗学会第49回研究会において各地の事例報告をもとに研究成果を発表する。

3. 今年度の研究経過及び成果

本研究では、葬儀の変化を縦軸(X軸)、村落の伝統的な民俗行事の変化を横軸(Y軸)として両者の関連を把握する調査を継続して行ってきた。昨年度までの調査では、葬儀は変化したものの民俗行事を維持する力が強い事例が複数注目されている。また、地域差の存在も具体的に指摘されてきた。今年度はそれらの事例のさらなる調査を行ない、伝承維持力の地域差の実態とその背景の分析に取り組んできた。

そして、葬儀の変化が、人びとの生活にどのように影響を与えているのか、葬儀という現象面の変化だけでなく、その地域社会の変化にも注目する、という視点に立つことが重要であるという観点から、本研究の成果のまとめとして、現代民俗学会第49回研究会(3月7日 於:お茶の水女子大学)で、「葬儀の変化と地域社会」をテーマに研究成果を発表することとした。(新型コロナウイルス感染の状況をふまえて研究会は急遽中止)。

成果としては次の3点があげられる。

第一に、葬儀の変化とその対応の地域差(縦軸:X軸)について、これまでの調査から、九州南西部では土葬から火葬への変化に伴う大型納骨堂の建設、近畿農村では土葬から火葬への変化に伴うサンマイ(埋葬墓地)利用の変化、北関東では自宅葬からホール葬への変化に伴う組のつきあいの消滅、東北の秋田県の事例では自宅葬からホール葬への変化に伴う霊送り習俗の消滅などが具体的に報告され、変化の中での地域ごとの多様な対応が指摘できる。

第二に、葬儀の変化による相互扶助の喪失と村落の伝統的な民俗行事の変化(横軸:Y軸)について、葬儀の変化は起こっても、村落の伝統的な民俗行事のうち、「壬生の花田植」などユネスコ無形文化遺産登録や無形民俗文化財指定の事例、関東地方をはじめとする各地の初盆行事の伝承、沖縄の清明祭や周辺島嶼部の十六日祭、墓開きと呼ばれる洗骨儀礼など死者の供養や先祖祭祀の行事は、比較的強い伝承力を維持していることが指摘できる。

第三に、A:村落社会の相互扶助という基盤の上に、B-1葬儀、B-2伝統行事等の伝承があるが、B-1葬儀とB-2伝統行事の伝承動態は互いに独立的であったといえる。そして、①B-1葬儀が変化しても、A:村落社会の相互扶助もB-2伝統行事も揺らぎが少なく伝承されている事例と、一方、②B-1葬儀の変化によって、A:村落社会の相互扶助の基盤まで揺らぎ、B-2伝統行事の伝承も崩れている事例があることが判明した。②の場合には、B-1葬儀の相互扶助が、A:村落社会のそれと結びついて相関的であり、それが村落社会の連帯にとって最後の砦であったといえる。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎関沢まゆみ 本館研究部・教授  
 新谷 尚紀 國學院大學大学院・客員教授  
 武井 基晃 筑波大学人文社会系・准教授  
 宮内 貴久 お茶の水女子大学基幹研究院・教授

(19) 基盤研究 (B)  
 朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究  
 —イワシをめぐる韓国の民俗変化  
 2017～2020年度  
 (研究代表者 松田睦彦)

1. 目的

本研究では、明治中期から第二次大戦終結まで日本人漁民によって行われた朝鮮海出漁を、日本の文化の朝鮮半島への移入の歴史ととらえ、その経緯と現代の韓国の生活文化に残る影響を明らかにする。具体的には、魚油や肥料、煮干の原料として、経済・軍事・生活などの面で重要な位置を占め、朝鮮半島の生活文化に変革をもたらしたイワシをめぐる出漁を取り上げ、Ⅰ. イワシを追った朝鮮海出漁の背景と実態、Ⅱ. 朝鮮海出漁が朝鮮半島の人々の生活に与えた影響について、文献資料や現地で採集された記録・語りから明らかにする。本研究は、イワシをめぐる韓国の現在の生活文化の観察を起点にすることで、「植民地収奪論」や「植民地近代化論」に回収されない、Ⅲ. 日本と東アジア諸国との新たな生活文化研究の枠組みを提示する。

2. 今年度の研究計画

【韓国における調査・研究】

①韓国の伝統的な漁船であるトングミンベに和船の技術がどう移入されたかを、温陽民俗博物館をはじめとする、韓国国内の博物館・資料館所蔵のトングミンベの実測から明らかにする。②韓国におけるカタクチイワシの利用の現状を明らかにするとともに、煮干しの規格名について日本語との共通点に留意しながら調査する。③漁撈用語や大漁旗、労働歌など、現在の韓国に残る日本人漁民の文化的影響の例を確認するとともに、その移入過程について検討する。④カタクチイワシ漁のために日本人漁民が居住した地域について、その歴史的経緯を明らかにする。

【日本における調査・研究】

⑤朝鮮海出漁母村に残る資料の分析作業を進め、聞き取り調査も行なう。⑥日本の煮干し製造の歴史および技術について調査する。⑦日本のカタクチイワシ利用の歴史と現在の様相について調査する。⑧日本のカタクチイワシ漁の技術について調査する。

【その他】

⑨中国の漁船に対する和船技術の影響について調査を行なう。⑩カタクチイワシ以外にも、日韓の文化的影響関係の検証に資する対象については、積極的に調査を進める。

3. 今年度の研究経過及び成果

本年度は、研究実施計画にしたがい、韓国、日本、中国での調査をおこなった。

韓国では、カタクチイワシ利用の現状についての聞き取り調査をおこなうとともに、日本人漁民によって韓国に伝えられた大漁旗や労働歌について、研究協力者による調査、および、専門家との意見交換をおこなった。なお、今年度はトングミンベ（韓国型漁船）に関する調査を実施することができなかったが、次年度あらためて調査をおこない、報告書等のかたちで発表をおこないたい。

日本では、朝鮮海出漁に関する資料が残る、広島県坂町および香川県観音寺市伊吹島の個人宅での調査をおこなった。また、朝鮮海出漁をおこなっていた徳島県阿南市椿泊の祭礼調査もおこなった。さらに、大分県佐伯市の佐伯市歴史資料館において、展示見学をおこなうとともに巾着網や改良揚繰網等の漁具の調査をおこなった。

中国では、青島において、日本人漁民の出漁による中国型漁船の変化について、中国海洋大学の協力を得ながら、簡易計測や聞き取り等の調査をおこなった。

なお、国立歴史民俗博物館と韓国国立民俗博物館との共催による国際企画展示「昆布とミヨクー潮香るくらしの日韓比較文化誌」が、2019年10月2日から2020年2月2日までの会期で、韓国国立民俗博物館（ソウル）で開催された。この展示の第3部「海を越える」では、近代における日韓漁民の接触と文化変化を取りあげており、本研究のこれまでの成果が、展示および図録に反映された。本展示は国立歴史民俗博物館（千葉）において2020年3月17

日から5月17日までの会期で開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

磯本 宏紀 徳島県立博物館・学芸係長  
川島 秀一 東北大学災害科学国際研究所・シニア研究員  
昆 政明 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・特任教授  
島立 理子 千葉県立中央博物館・主任上席研究員

◎松田 陸彦 本館研究部・准教授

### (20) 基盤研究（B）

#### 中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化

2016～2020年度

（研究代表者 荒木和憲）

##### 1. 目的

本研究の目的は、中世日本の分権的な社会で分散的に生成された「東アジア交流史関係史料」を網羅的に収集・分析し、史料論的側面から、中世日本の東アジア交流史研究の総合化を図ることである。具体的手順としては、収集した史料の基本情報と本文テキストをデータ化し、これに個々の史料の生成・授受等に関わるメタデータを付加する。そして、ユーザーが任意の切り口から史料を検索することができるファセット検索システムを構築し、これに上記のデータを投入することで、中世社会における「東アジア交流史関係史料」の生成・授受等のあり方を表現するとともに、ユーザーが高度で有意な情報を自在に引き出せるようにする。当該システムは2016年度内に構築し、2017年度以降に研究成果の速報的な公開を図る。最終年度に研究成果報告書として『中世日本東アジア交流史基本史料集成（稿）』を作成し、将来的な史料集成の実現に向けた第一歩とする。

##### 2. 今年度の研究計画

昨年度と同様、代表者・研究分担者が所属する4機関で研究補助作業従事者を雇用し、その補助を受けながら、「東アジア交流史関係史料」の検出、基本情報・本文テキスト・メタデータの作成・入力を進める。代表者は全体の進捗状況を管理し、研究分担者から提供されたデータの集約と整合化の作業を行う。これらの作業によって作成されたデータをファセット検索システムで公開する。

##### 3. 今年度の研究経過及び成果

昨年度に引き続き、榎本班は中世前期の記録・典籍、伊藤班は九州に所在する中世後期の文書、荒木班は九州以外に所在する中世後期の文書・記録、須田班は禅宗関係史料（東京大学史料編纂所謄写本）にもとづき、「東アジア交流史関係史料」の検出・データ化作業を進めた。昨年度末までにデータ化したのは約4,600件であったが、今年度末には約7,000件に増加した。

ファセット検索システムは、「総合資料学情報基盤システム」（khirin）において試験公開中である。これに関しては、後藤班を中心として検索・表示機能の改善作業を進めた。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

伊藤 幸司 九州大学大学院比較社会文化研究院・教授  
榎本 渉 国際日本文化研究センター・准教授  
須田 牧子 東京大学史料編纂所・助教  
後藤 真 本館研究部・准教授

◎荒木 和憲 本館研究部・准教授

(21) 基盤研究 (B)  
 史料的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究  
 2016～2019年度  
 (研究代表者 小倉慈司)

1. 目的

古代の法制書『延喜式』は、延長5年(927)に完成し、康保4年(967)に施行された古代の基本史料の一つであるにもかかわらず、全50巻、条文数にして約3500条にも及び、内容が多岐にわたることもあって、これまでの研究や翻刻では必ずしも十分な校訂がなされずに使用されるなど、様々な問題を抱えている。そこで本研究では京都国立博物館など近年新たに紹介された写本も検討対象に加え、目録学や史料群研究、また近世の版本刊行・受容史研究など最新の史料学研究成果を踏まえつつ、改めて本文校訂をおこなう。新たな校訂本文を学界に提供することによって『延喜式』研究の基礎を固めるとともに、今後の『延喜式』研究の発展に結びつけていく。

本研究では以下の課題を設定する。

①『延喜式』諸写本の写本系統研究

12世紀以前の書写とされる九条家旧蔵卷子本や金剛寺所蔵本等の古写本の他、国立歴史民俗博物館所蔵土御門家旧蔵本・京都国立博物館本・国立公文書館所蔵紅葉山文庫本・宮内庁書陵部所蔵藤波家旧蔵本・同部所蔵壬生家旧蔵本・天理大学附属天理図書館所蔵梵舜本等の近世写本を調査、紙焼写真を蒐集し、写本系統を探る。九条家旧蔵卷子本が祖本である巻13を除き、近世写本の多くが現在は失われた一条家本に由来するのではないかとの推測がある。土御門家旧蔵本と他の近世写本、部分的に残る一条家本の影写本との異同を詳細に比較検討していくことにより、これを具体的に検証することが課題である。

②『延喜式』写本・版本書入れの調査研究および『延喜式』受容史の研究

写本・版本に書き入れられた校合や按文等を調査することにより、古代以来近世にいたるまでの『延喜式』の受容、校訂史を明らかにする。現状の校訂の中には根拠を持たない版本の文字や書入れを無批判に取り入れている事例も少なくない。単に埋もれていた研究を発掘するというだけでなく、本文校訂のためにも必要な作業であり、①の写本系統研究にも資すると考えられる。一方、書入れは、それがなされた時期や経緯を探ることにより、『延喜式』の理解にとどまらず、そこに記された食材(例えばアワビ)や器物、あるいは事柄等の歴史の変遷を解明する上で貴重な歴史情報でもある。諸本の書入れを総合的に検討することで、前近代の文化史・技術史といった分野の研究にも結びつけていきたい。

③校訂本文作成

①②の調査結果をもとに、現在の研究水準を踏まえた『延喜式』校訂本文を作成し、その成果を公表する。

本研究がこれまでなされて来なかったことの原因としては、『延喜式』が大部にわたる史料であるため、個人で取り組むことが難しかったこと、奥書のある写本が少なく写本系統を探ることが容易でなかったことなどが挙げられる。

しかし目録学や中近世公家社会における典籍受容史の研究が進化したことにより、『延喜式』の書写関係についてもおおまかな見通しを立てることが可能な段階に達してきた。また諸機関に蔵される写本・版本の所在把握・画像閲覧が以前に比べて容易になりつつあることも指摘しておきたい。とはいえ本文校訂は労力を要する割に地味な研究であり、熱意を持つ複数の研究者が協力して研究を進めることが必要となる。

近世の版本開版、近代の活字本刊行がそれぞれ研究の進展につながったように、今、改めて最新の史料学研究成果を踏まえた校訂本文を作成することによって、『延喜式』を利用した研究が活発化することが予想される。『延喜式』には科学史や考古学等諸分野に資する様々な内容が収められており、文献史学、また日本古代史のみならず様々な分野における活用にも結びつくことと考えられる。

2. 今年度の研究計画

最終年度にあたる今年度は昨年度調査した『延喜式』注釈書のほか、ようやく閲覧が再開する無窮会専門図書館所蔵写本の調査を実施する。それらをもとに本文系統研究を進め、校訂本文作成に着手する。

本文研究についても研究メンバーのみならず適宜、関係研究者・有識者の協力を得つつ進める。また作業を効率的に進めるために、大学院生もしくは若手研究者を研究支援者として雇用する。これには研究者育成という目的も込められている。今年度は今後の研究展開も見据え、アメリカの若手研究者とともに英訳のためのワークショップを開催する。

なお、例年通り、公開の研究会も開催する。

### 3. 今年度の研究経過

今年度は、昨年度に調査を行なった天理大学附属天理図書館所蔵『神祇官八神殿秘訣』『諸神記』『諸社根元記』や、名古屋市鶴舞中央図書館河村文庫所蔵『延喜式』版本、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵葉室本『年中行事秘抄』・『内裏式』藤貞幹校本・諸陵寮本『政事要略』等の紙焼写真蒐集を行なった。『神祇官八神殿秘訣』は西田長男氏による研究があるものの、これまで注目されてこなかったが、『延喜式』の伝来を考える上で重要な記述を有している。なお当初予定していた無窮会専門図書館の調査は、再び閲覧休止となったため、果たせなかった。

本文研究としては、勢多家所蔵版本についての研究や神祇式についての検討、巻5斎宮式の校訂本文、巻14縫殿式の写本系統研究、巻17内匠式の写本系統研究・校訂本文・現代語訳についての論考を公刊することができ、また新たに巻11の校訂本文・現代語訳等を作成して査読誌に投稿した。内容に関わる研究として、典薬式に見える薬物名から朝鮮半島医薬文化の影響を探り、斎宮式から堅魚製品の貢納と消費の実態を明らかにした。縫殿式13雑染用度条を取り上げ、江戸時代における『延喜式』研究についても検討を行なった。このほか「延喜神名式と式内社」と題する講演等を行なった。

データベースについては、昨年度公開した延喜式関係論文目録データベースにデータの修正・増補を行なった(8月に4220件)。年度後半作業分は2020年度に公開する。

英訳については2019年6～7月および2020年2～3月にアメリカより若手研究者を招いて英訳ワークショップ・検討会を実施した。また海外における『延喜式』の研究状況をまとめた論考を公表した。

この他、国立歴史民俗博物館共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」と連携し、『延喜式』研究に関心を持つ研究者や大学院生にも参加を呼びかけて、2019年8月31日に公開研究会を開催した。この概要については、科研と連携して実施している共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の項を参照されたい。

### 4. 今年度の研究成果

#### 【論文等】

中村光一、平安前期における近衛大将の補任について、日本史学集録40, pp.45-57, 2019年7月, 査読有

早川万年、延喜神祇式の本文校訂について、国立歴史民俗博物館研究報告218, pp.31-40, 2019年12月, 査読有

小倉慈司、『延喜式』巻一七の写本系統と本文校訂、国立歴史民俗博物館研究報告218, pp.103-125, 2019年12月, 査読有

中村光一、江戸時代における『延喜式』研究の一様相、国立歴史民俗博物館研究報告218, pp.255-278, 2019年12月, 査読有

三上喜孝、慶州・雁鴨池出土の薬物名木簡再論、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

酒井清治、主計式の甕と出土土器のハソウ、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

仁藤敦史、「延喜斎宮式」から見た堅魚製品の貢納と消費、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

小倉慈司、『延喜式』巻五校訂(稿)、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

清武雄二、古代の税物生産における長鯨、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

清武雄二・神戸航介・堀部猛・古田一史、『延喜式』巻十七「内匠寮」現代語訳(稿)、国立歴史民俗博物館研究報告218, 2019年12月, 査読有

小倉慈司、皮革生産賤視観の発生、日本史研究691, 2020年3月, 査読有

#### 【分担執筆】

仁藤敦史(川尻秋生編)、古代都城の思想、『古代の都城と交通』、竹林舎、2019年5月

酒井清治、関東における須恵器生産と流通—武蔵を中心に—、特別展図録『那須の古代窯業—瓦・須恵器の生産と流通—』大田原市なす風土記の丘湯津上資料館2019年9月

仁藤敦史(白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編)、天若日子伝承再考—モガリの主宰—、『古墳と国家形成期の諸問題』、山川出版社、2019年10月

酒井清治(白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編)、日韓の軟質系土器と軟質土器の生産、『古墳と国家形成期の諸問題』、山川出版社、2019年10月

小倉慈司(新古代史の会編)、『延喜式』、『テーマで学ぶ日本古代史』社会・史料編、吉川弘文館、2020年6月

#### 【口頭報告】

小倉慈司、古代の天皇と神祇祭祀、天皇制と日本—歴史、政治、社会、文化との関わりをめぐって—学術シンポ

ジウム, 北京外国語大学, 2019年9月28日

小倉慈司, 皮革生産賤視観の発生, 日本史研究会古代史部会例会(大会個別報告代替報告), 機関紙会館, 2019年10月22日

仁藤敦史, 古代国家と讓位制の成立—「平成の代替わり」を古代史から考える—, シンポジウム「天皇と皇位継承のコスモロジー」, 明治大学, 2019年4月13日

#### 【講演】

酒井清治, 生産の考古学—窯業, 日本考古学協会第85回(2019年度)総会, 駒沢大学, 2019年5月18日

仁藤敦史, 太上天皇の成立と展開—皇極・孝謙・齊明の事例を中心に—, 國學院大學文化講演会, 国学院大学, 2019年6月8日

小倉慈司, 江戸時代における古代典籍の伝来—政事要略を中心に—, 蓬左文庫典籍研究会講演会, 愛知大学車道キャンパス, 2019年6月30日

早川万年, 聖武天皇の東国行幸, 養老歴史講座, 養老町中央公民館, 2019年8月25日

小倉慈司, 延喜神名式と式内社, 皇学館大学史学会, 皇学館大学, 2019年11月22日

#### 【その他】

仁藤敦史, 書評 古市晃著『古代国家形成期の王宮と地域社会』, 歴史評論838, 2020年2月

小倉慈司, 書評 矢野建一著『日本古代の宗教と社会』, 歴史評論840, 2020年4月

延喜式関係論文目録データベース 2019年8月データ増補

#### 5. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎小倉 慈司 本館研究部・准教授 研究の統括と推進・写本研究・本文研究(祭祀分野)

#### 【研究分担者】

清武 雄二 本館研究部・特任助教 統括補助・写本研究・本文研究(技術分野)

酒井 清治 駒澤大学文学部教授 本文研究(技術分野)

中村 光一 上武大学ビジネス情報学部教授 本文研究(技術分野)

仁藤 敦史 本館研究部・教授 本文研究(政治・法制分野)

早川 万年 岐阜大学教育学部教授 版本研究・本文研究(祭祀・儀礼分野)

三上 喜孝 本館研究部・教授 本文研究(経済分野)

#### 【連携研究者】

町 泉寿郎 二松学舎大学文学部・教授 版本研究(受容史)・本文研究(医学分野)

#### (22) 基盤研究(B)

現代日本における死者儀礼のゆくえ  
—生者と死者の共同性の構築をめざして  
2016～2019年度  
(研究代表者 山田慎也)

##### 1. 目的

本研究の目的は, 死者儀礼を担う共同体や社会関係などの「ヒト」と, 死者の表象となる墓や遺影など「モノ」との関係を通して, 現在生成されている新たな共同性を捉えることで, 人びとの死生観の変遷を考察することである。

現在, 直葬や散骨, 樹木葬などの新たな儀礼が誕生し, 孤独死の増加など, 死者儀礼は大きく変容し社会問題化している。これは社会の個人化の進展が背景にある一方で, 従来には見られない新たな共同性を持つ事象が誕生している。本研究では, 従来の分析枠組みでは捉えきれない事象に対し, 生者と死者の共同性を析出し, 個人化の進んだ社会における死の受容のあり方を検討するものである。これにより, 従来の葬送墓制研究の新たな段階を構築するだけでなく, 大きな社会問題ともなっている現代人の死への対処法への解決にも貢献するものである。

##### 2. 今年度の研究計画

本研究の総括とその成果還元として, 昨年2018年12月15日・16日に国立歴史民俗博物館・早稲田大学人間科学学術院との共催によって行った歴博フォーラム「死者と生者の共同性—葬送墓制の再構築を目指して」を基盤とした, 論文集の出版に取り組む。



現代班では、「現代死者儀礼写真」として整理している資料群の関連データの追加を完了し、諸権利に考慮した利用の体制を整える。この資料群は葬儀業界誌『SOGI』の現代葬儀レポートその他の葬儀写真であり、1990年代以降の葬儀の変化を示す貴重な写真類で、2017年の廃刊により歴博が寄贈を受け、そのデジタル化を進めてきたものである。また近親者のいない人への葬儀支援や祭祀のあり方について、その対応や実態の多様性についての補足調査を行い、研究を総括する。

高度経済成長期班では、公園墓地などの家族墓の形態と、墓の代替として作られた納骨堂について、現代の多様な形態を含め捕捉調査をおこなって研究を総括し、墳墓の無緑化との関連を検討し、法的問題も含め研究をとりまとめめる。さらに戦後の新生活運動と地域の関係についての調査も総括する。

近代班では、都市近郊の墓地として東京都狛江市泉龍寺墓地の墓碑調査および位牌調査の総括を行う。とくに位牌の形態は墓碑の形態との連関があることが指摘でき、その後の家庭での位牌祭祀にも大きな影響を及ぼしている。このような位牌研究は従来あまり行われておらず、その成果はあらたな研究分野を開拓したものである。また、今までの調査で必ずしも明確ではなかった葬送墓制に関するビジュアル的な側面を把握するため、近代の葬送墓制に関する映像資料を調査する。国立映画アーカイブには浜口雄幸などの近代の著名人の葬儀の記録映像があり、これをメンバーで調査し、儀礼形態の検討を行う。以上、調査の成果をとりまとめ近代の葬送墓制の姿を明らかにするものである。

### 3. 今年度の研究経過

全体研究会として、国立映画アーカイブに所蔵されている近代の葬送墓制に関する映像資料の調査研究会を行った。浜口雄幸や東郷平八郎など近代の著名人の葬儀記録映像や一般家庭の映像をほぼ1日掛けて検討した。

また各班の研究では、現代班は「現代死者儀礼写真」として整理している資料群の関連データの追加を完了した。利用者が必要な諸権利の手続きを行う上で、研究代表者の所属機関である国立歴史民俗博物館の資料として利用する体制を整えた。さらに現代の家族の変容によって、高齢者施設などでの共同墓の調査や、精神科を持つ病院を営々する社会福祉法人が、葬儀の実施と納骨堂運営を行う助葬制度について調査を行った。またデジタル時代の葬送の特質を納骨堂での故人の遺影提示等の調査を行った。

高度経済成長期班では、家族墓の改葬とその対応および法的問題について引き続き検討を行っていった。そこでは、改葬による死者の意思と尊厳への侵害に留意している。

近代班では、都市近郊の墓地として狛江市泉龍寺墓地の墓碑調査および位牌調査の報告書をまとめ作業を行った。さらに両墓制のあり方も、地域の墓地意識に留意してその相違点を調査した。

### 4. 今年度の研究成果

国立映画アーカイブ所蔵の近代葬送墓制映像資料は、浜口雄幸や東郷平八郎など近代の著名人だけでなく、それ以外の人々の葬儀記録映像もあり、写真では動きが不明であった葬列の奴行列や、政治家などの大型葬における参列者の拜礼の仕方など、近代の儀礼形態の不明な部分が判明した点などその成果は大きいものである。今回の科研では実現しなかったが、当科研の研究成果と合わせて映画アーカイブでの上映シンポジウムなどの可能性もみだされた。

また各班の実績として、現代班は整理を行った「現代死者儀礼写真」では、1990年代以降の急速な変化を把握することが出来る写真資料であり、今後時間が経つに従ってその資料的な価値は増すことと考える。さらに現代の家族の変容によって、高齢者施設などで共同墓が作られるなど、生前の共同性の状況が、死後にも強く反映し、死の共同性だけでは成立しないことが明らかになった。近親者のいない人への葬儀支援も、少しずつ地域の状況に合わせて取り組みが行われていることも指摘している。またデジタル時代の葬送の特質と死生観も新たな状況が生まれていることがわかった。

高度経済成長期班では、公園墓地などの家族墓の形態は、承継者がいないことで改葬が進んでいく事態について分析し、改葬による死者の意思と尊厳への侵害の危険性も指摘した。近代班では、都市近郊の墓地として狛江市泉龍寺墓地の墓碑調査および位牌調査によって、位牌の格式がその型式、高さ、戒名を指標としており墓標の格式の指標と共通性を持つことが明らかとなった。さらに両墓制のあり方も、火葬化によって単に消滅するのではなく、地域の墓地意識の反映によって異なっており、多様性とその要因の理解が必要であることがわかった。以上のように現代の葬送墓制の変動が多面的であることを明らかにした。

### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎山田 慎也 本館研究部・教授

鈴木 岩弓 東北大学文学部・総長特命教授

森 謙二	茨城キリスト教大学文学部・教授	谷川 章雄	早稲田大学人間科学学術院・教授
村上 興匡	大正大学文学部・教授	土居 浩	ものづくり大学技能工学部・教授
朽木 量	千葉商科大学政策情報学部・教授	小谷みどり	身延山大学仏教学部・客員教授
瓜生 大輔	東京大学先端科学技術研究センター・助教	金セツピョル	総合地球環境学研究所・特任助教
檜村 久子	関西大学・客員教授	問芝 志保	日本学術振興会・特別研究員
大場 あや	大正大学・後期博士課程		

## (23) 基盤研究 (B) 林業遺産の保存と持続的な活用による林業教育・地域づくりの可能性 2016～2019年度 (研究代表者 柴崎茂光)

### 1. 目的

林業遺産に対する関心が高まる一方で、大半の林業遺産は年々風化が進む。こうした状況の中で、本研究では、林業遺産を持続的に保全するとともに、長期的な視点から林業教育や地域づくりにつなげるための方策を探る。具体的には、全国の林業遺産に関する網羅的な調査を行い、その現状と課題を把握する。また、活用されている林業遺産の事例分析を行い、遺産保存と活用上の課題を明らかにする。このほかに、風化の危機に瀕している林業遺産の状況を明らかにした上で、活用に向けた潜在的可能性を探る。さらに、得られた情報を包括的に取りまとめる。

### 2. 今年度の研究計画

昨年度に引き続き、活用されている林業遺産については遺産保存に関するガバナンスやガバナンス構築後のマネジメントの実態を明らかにする。保存状態が悪く、一部消失しているフィールド系の林業遺構を抱える地域を対象とした調査では、考古学的知見も活用しながら林業遺構の実態調査を継続する。最終年度であるため、これまでに収集したフィールド調査（国内外）の知見を踏まえつつ、それぞれの地域の保全・活用の特徴を相対化させる。最終年度に関しては、さらなる保全活用のためにどのような制度構築が求められるかといった政策提言についてメンバー間で情報共有した上で、具体的な制度改変を考察・提案する。さらに、こうした研究・検討の成果は、初年度から昨年度まで実施してきた学会やシンポジウム、学術誌等での口頭発表、論文発表にとどまらず、学術書や一般書などに執筆する方向でとりまとめる作業を引き続き進める。

### 3. 今年度の研究成果

最終年度であることから、包括的な視点から研究成果を発表した。たとえば研究代表者は、屋久島の林業遺産野保全に関する官学連携の成果について、森林・林業の技術交流会において、屋久島森林管理署の職員と協働で「屋久島に於ける林業遺産の取扱について」を発表し、森林鉄道・軌道跡を中心とした林業遺産の保全に関する現状と課題を報告した（2019年10月）。この他に、「山とひとのつながりを考える国際シンポジウム」（事務局：筑波大学）において、森林鉄道や山の神といった林業遺構をめぐる保全の仕組みが脆弱であり、常に破損・消失のおそれがあることを明らかにした。こうした状況を改善する為に、遺産の再価値化を促す協働型の教育プログラムの必要性や、林業遺産の保全にむけた法制度構築の必要性を主張した。具体的な法令の整備に関しては、景観や生態系維持のために設定された保護地域であっても、歴史・文化的資産を保全するゾーニング制度の構築を提案した。また同一地域であっても、注目される価値が年代ごとに変動する事から、長期的な視点に立つて多様な価値の保全をしようとする研究者の役割も不可欠と考察した。

このほかに、本科研メンバーを中心として執筆を進めている専門書や一般書について、章構成を議論し、草案に対する修正事項を指摘することを主たる目的とした打ち合わせも2回実施した。このほかに、フィールド調査に関する補足調査として、例えば、昭和初期に、農山漁村経済更生運動の一環として森林道場跡地を訪問し、往時の文書や資料について撮影調査を行った。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎柴崎 茂光 本館研究部・准教授

#### 【研究分担者】

上野 祥史 本館研究部・准教授

奥 敬一 富山大学芸術学部

奥山洋一郎 鹿児島大学農水産獣医学域農学系  
 武田 泉 北海道教育大学教育学部  
 林 雅秀 山形大学農学部  
 深町加津枝 京都大学地球環境学堂  
 八巻 一成 森林総合研究所  
 山田 康弘 本館研究部・教授

【連携研究者】

竹本 太郎 東京農工大学農学部  
 平野悠一郎 森林総合研究所

(24) 基盤研究 (C)  
 1970年代～80年代の消費者運動の再編成課程に関する実証的研究  
 2018～2020年度  
 (研究代表者 原山浩介)

1. 目的

本研究は、1970年代から90年代初頭にかけての、消費者運動の再編過程を、関西における消費者団体等の動きに焦点を当てて解明しようとするものである。この時期は、高度経済成長期にみられた消費者の権利と異議申し立てをめぐる諸団体の主張の一体性の解体過程として経験された。その背景には、経済成長の達成と豊かさの実感の獲得に伴う消費者の嗜好の多様化と、公害・環境汚染の前景化に伴う消費行動の自覚的な問い直しという、大きく二つの要因があった。ここに、地域レベルでの生協運動など住民を担い手とする運動の担い手の世代交代が絡むことで、消費をめぐる運動の再編成が起こった。それまでの消費者運動が有していた一体性の解体を孕むこの一連の過程を検証しながら、消費をめぐる社会的に共有される問題構成とそれへの取り組みがどのように再編成されたのかを明らかにする。

2. 今年度の研究計画

今年度は、市民運動関係者に加え、琵琶湖の漁師からの聞き取り調査を実施する。

琵琶湖の汚染をめぐる市民運動をめぐることは、汚染による直接の被害者ではない琵琶湖上流の住民による取り組みとして注目を集め、1970年代の市民運動の到達点としての評価も存在している。しかしながら、今日に至るまでの過程で、問題解決に至らないままに関心の希薄化が起きていることを考えると、そうした評価そのものを、社会運動論の蓄積過程の問題として再検討するとともに、1970年代から80年代に展開した市民運動の時代的特性とその限界を見直す必要がある。この琵琶湖をめぐる諸問題を解明するためには、市民運動側からの聞き取り調査に加え、漁師からの聞き取りを行いながら、総合的な把握を目ざす必要がある。

ただ、これは本研究で取り組むべき範囲を超える可能性があり、成果のとりまとめに支障を来す可能性がある。そのため、本研究においては、消費者運動をめぐる分析・評価の必然性において漁師への調査に取り組むことを心がけ、課題としての発展性の度合いに応じて、新たなテーマ設定の研究課題への分岐／継承を検討することとする。

3. 今年度の研究経過及び成果

本来であれば今年度は、研究の中心となる現地調査を展開する予定だったが、職場の事情から出張がままならず、近隣で入手が可能な資料、ならびに手許にある資料を中心にした分析を重点的に行わざるを得なかった。したがってむしろこの機に、消費者団体に関する悉皆的なデータ整理と分析を進めることに注力した。

当初、本研究で対象としている関西の動向に限定して整理をする計画であったが、主婦連合会、地婦連、全国消団連、日本消費者協会、そして関西ローカルでは関西主婦連合会という、それぞれのナショナルセンターやリージョナルセンターの影響が地域の活動主体の編成に影響を与えていることに鑑み、日本の消費者運動の全体像を描く必要が生じた。加えて、日本生活協同組合連合会に加盟する生協、ならびに1980年代以降に登場した独立系の生協、さらにはおおむね1970年代からの共同購入グループの登場を、この全体の構図のなかで再整理する必要が生じた。こうしたことから、関西に焦点を当てながらも、全体の構図をはっきりとさせるための地道な作業を行うこととした。

分析はまだ途中であるが、特に大阪の場合は中小の消費者団体が多く、相互の棲み分けがなされている。これまでの分析では、ナショナルセンター・リージョナルセンターの影響力がみられるものの、興味深いことに、1960年

代以前からの歴史がある団体は、1970年代以降も高度経済成長期型の活動を維持するところが多い。そこに、有機農業や合成洗剤追放といった課題を掲げる新興の団体が、革新政党（但し社会党・共産党の間には科学性において主張に隔たりがある）の主張と一定の親和性を持ちながら活動を展開するという構図が浮かび上がり、この点については2020年3月に研究会報告を行った。

なお、1970年前後に、米価問題をめぐって消費者運動の足並みが揃わなくなるのだが、これがそれぞれの中小団体にどのように影を落としたのかは、さらに踏み込んだ検討が必要である。

以上の整理は、現地調査の充実を図る上での重要な基盤となることは間違いなく、次年度の現地調査と研究のとりまとめ作業に活かしていくことを考えている。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎原山 浩介 本館研究部・准教授

### (25) 基盤研究（C） 博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像Web閲覧の新手法の構築 2018～2020年度 (研究代表者 鈴木卓治)

#### 1. 目的

インターネットで日本歴史資料の高精細デジタル画像の公開が進む現状に鑑み、単なる熟覧の範囲を超えた、博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像閲覧の方法を提案する。具体的には、IIIFに代表される、呼び出し方法が標準化された超高精細デジタル画像の全体あるいは一部をWebブラウザの画面上に構成して表示し、さらに動きや条件分岐を含むシナリオを与えて、それらの画像をタイミングよく切り替え解説を含めて提示するWebコンテンツの制作システムを試作する。「展示」の技法を導入することで、単なる資料熟覧の範囲を超えて、資料のもつ意義や資料間の相互関係を立体的に紹介するコンテンツを、最小限のコストで、インターネット上で世界中に公開することを目指すとともに、IIIFの採用により、複数機関が所有する資料の相互利用を可能とし、インターネットの特質を生かした「仮想展示」の可能性を広げることを目標とする。

#### 2. 今年度の研究計画

本課題で目指すのは、「PowerPointスライド」並のプレゼンテーションを、個別にプログラムを作るより少ない手間で作成できるオーサリングシステムの実現である。

第2年度(2019年度)にシステムの検証と改良ならびに実用化にむけての超高精細画像データの作成を実施する。ここでは動的な要素を取り入れた表現、たとえば、1. 画像をフェードイン、フェードアウトさせる（何秒で）機能、2. 画像を画面上で動かす（どこからどこまで何秒で）機能、3. 画像の拡大率を変化させる（どこからどこまで何秒で）機能、4. バルーンによる解説文表示（どの部分にどのタイミングで何秒間で）機能、5. 図形や矢印等の説明を補助する図形の表示（どこにどの大きさ、形で、何秒間）機能、6. ボタン等による簡単な条件分岐表示（表示する画像を選択するなど）機能の実装をめざす。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

本年度はシステムの検証と改良ならびに実用化にむけての超高精細画像データの作成を実施した。計画した機能の実装は、1, 2, 3について達成することができた。2019年夏に国立歴史民俗博物館において開催した新特集展示「もののけの夏」において、百鬼夜行図（本館蔵）の超高精細画像をオートスクロールして表示する（約4分で全体を閲覧することができる）コンテンツを展示場にて利用に供し、好評を博した。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎鈴木 卓治 本館研究部・教授

(26) 基盤研究 (C)  
幕末世相取材錦絵の美術史的研究  
2017～2019年度  
(研究代表者 大久保純一)

1. 目的

幕末の諷刺画や世相に取材した錦絵を、伝統図像や主題との関係、あるいは個々のモチーフが担う意味についての先行事例など、絵画史的観点から分析を加える。従来、美人画、役者絵、名所絵が錦絵の三大ジャンルとされてきたが、幕末動乱の世情を背景に、世相諷刺、あるいは流行り病や災害など世情に取材する錦絵の出版は激増し、上述の三大ジャンルに匹敵する市場を確立している。幕末政治史や社会史では研究対象とされてきたが、美術史の方面では芸術性に乏しいという理由で看過されてきたそうした錦絵を、先行する浮世絵作品、古絵巻や版本挿絵の図像伝統を踏まえ、そこにいかなる意味付与がなされたのかなど絵画史上の位置づけを試み、また従来世相諷刺とは認識されてこなかった作品の新たな掘り起こしも試みる。

2. 今年度の研究計画

- 1) 国内外の所蔵機関の浮世絵コレクションを実地調査、あるいは公開されている国内外のデータベースや図録などを通して調査し、できるだけ多くの世相取材の錦絵の画像情報を収集し、申請者自身の研究基盤となるデータベース作成をおこなう。データベースには、画像と作者、版元、改印(検閲印)といった書誌情報に加え、解説のキーワードとなるモチーフ情報もできるだけ詳細に盛り込み、検索時の有効性を高める。
- 2) 諷刺画等の世相取材錦絵の図像源泉となった可能性のある読本や武者絵本といった版本類、あるいは古絵巻の模写などを国内外の所蔵機関の収集品から探し出す。国内の具体的な調査先としては、町田市立国際版画美術館、複数の個人所蔵家のコレクションなどを中心に構成する。
- 3) 調査内容の一部を、夏に開催する特集展示「もののけの夏—江戸文化の中の幽霊・妖怪—」の一部、具体的には幽霊表現と諷刺の章に取り入れる。

3. 今年度の研究経過及び成果

江戸時代末期に出版された錦絵の諷刺画を、諷刺の読み解きのコードや主題をもとに、以下のカテゴリーに分類した。

- 1) 武者絵など過去の歴史的出来事に偽装したもの。2) 異類合戦に事寄せたもの。3) 市井風俗画を装ったもの。4) 子供あそびに仮託したもの。5) 鳥瞰図に戊辰戦争の戦場を重ねたもの。6) 百鬼夜行図などの妖怪画に仮託したもの。

この分類をもとに、諷刺画作成にも従来の武者絵において幕府の統制を回避する手法が応用されていることを明らかにした。また、従来諷刺画と認識されていなかった錦絵をあらたに諷刺画として抽出しうる可能性を見出しえた。成果の一部は、国立歴史民俗博物館の特集展示「もののけの夏—江戸文化の中の幽霊・妖怪—」の展示内容に反映させた。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎大久保純一 本館研究部・教授

(27) 基盤研究 (C)  
古代日本の食材加工にみる律令国家税制の実態的研究  
2017～2019年度  
(研究代表者 清武雄二)

1. 目的

古代日本の律令国家税制は各地からの現物の直接貢納を原則としており、国家が必要とする食材についても平安時代の法制書である『延喜式』や都城から出土する木簡等に食材名称が頻出している。保存が容易ではない古代においては、長距離の運搬や一定期間の保管に耐え得る乾燥・発酵の方法が駆使されたものと思われるが、加工法・運搬・保管・調理・消費については史料にはほとんど記述されておらず、実態は不明である。本研究では、文献史

料のほか、木簡記載の食材名称に併記される数量や助数詞を集成・分析して食材の形状や管理の単位を考証するとともに、乾燥加工等の再現実験によって加工法や運搬・保管の在り方を検証することで、律令国家税制の解明に資する新たな基礎的データを提供し、研究の深化・発展に寄与することを目的とする。

本研究では、以下の視点を重視した具体的課題を設定し、アプローチしていく。

#### 【文献史料・木簡記載の数量詞・助数詞の集成と分析】

保存のための乾燥・発酵といった加工が施される水産物等の食材は、加工に応じて数量・重量に変化が生じることが予想される。個々の税物の律令税制上に規定される重量・容積の計測基準を明らかにする基礎データとして、『延喜式』や「正倉院文書」、木簡といった史料に記載される数量および助数詞を食材毎に集成し、運搬や保管の形状、あるいは食材そのものの形状を推定する。特に採取・加工の適切な時期と貢納時期との時間差も考慮して、保管・運搬に必要な条件を検証する。各貢納食材の数量・助数詞の集成・検討は、税制全般の状況を把握しておくことが必要であるため、税物全般に関して行い、実態的な検証は加工実験で対象とする特定食材に限定して行う。まずは先行して検証を進めてきたアワビの乾燥品、次いでアワビの発酵品を取り上げ、あわせてアワビと同一地域から貢納されることの多い海藻類を具体的検討対象とする。

#### 【加工実験による分析】

アワビ、海藻類の乾燥品について、天日干し、陰干しの条件変化による加工手順などの工程上の差を確認する。あわせて成分分析を行い、食品としての状態を数値化して把握する。次いでアワビの発酵品を取り上げ、適切な採取時期、発酵期間と貢納時期との関係について検証する。検証で得られた形状や容積・重量の数値を文献史料・木簡の数量詞・助数詞による検討結果と比較して、貢納品一人あたりの実態的な形状、運搬に必要な条件等を算定する。

従来の研究は、稲作を除き、生産サイクルや加工手順などを考慮した実態的把握は進んでおらず、そもそもそれ自体を問題として認識し、解明に取り組んだ研究も多くはない。文献史料の分析を加工実験によって検証する本研究によって、税制および税物の生産・貢納に伴う実態の一端が明らかになれば、古代日本の国家と社会を理解する上で重要な成果となる。

## 2. 今年度の研究計画

研究対象として、古代の代表的な貢納食材であり、令制当初からの調の貢納品目であるアワビのなれ鮓（鮓鮓）とカツオの乾燥品（煮堅魚、籠堅魚）を取り上げる。

#### 【アワビの発酵品（鮓鮓）】

アワビの発酵品については、2018年度に腸漬鮓を対象として実施しているが、『延喜式』の腸漬鮓は貢納量が2斤10両の中男作物である。一方、2017年度以来加工実験を実施してきた乾燥品は調の税物であり、同じ調の税物である鮓鮓の方が比較検証においては適切であることを考慮して、今年度の調査・研究対象は鮓鮓とする。鮓鮓は、一人分の貢納量が46斤であり、アワビのほかに米・塩といった複数材料を使用する。これに対し、アワビの乾燥品の貢納量は4～6斤程度である。両者の貢納量は著しく異なるが、税負担の均等性は担保されていたと考えられることから、アワビの分量は適切に設定されたものであった可能性が高い。こうした観点から、鮓鮓の一人分の貢納量におけるアワビの分量を特定するとともに、製造の工程や時期・期間等を確認することが今年度の調査・研究目的である。

鮓鮓の加工法については、なれ鮓生産に関する民俗調査事例等の文献を参照するとともに、現在のなれ鮓生産者からの聞き取り調査を実施して、材料比率や加工手順等を特定する。ただし、現在、貝類のなれ鮓は製造が行われておらず、算定した数値等の正確性を確認する必要があるため、加工実験による検証を行う。また、なれ鮓の発酵加工がアワビに与える影響や鮓鮓の食品特性を確認するため、成分分析を実施する。

#### 【カツオの乾燥品（煮堅魚、籠堅魚）】

カツオの貢納食材は、2018年度に文献史料や木簡データの数量・助数詞の分析、およびカツオの伝統食品製造業者からの聞き取り調査を行っている。その成果として、回遊魚であるカツオの特性上、脂質が低い状態の春～夏頃のいわゆる初カツオを使用したとみられること、貢納される煮堅魚・籠堅魚の単位数量はともに1節あたり約90gであったことが判明している。この結果を前提として、今年度は具体的な加工の形状や工程について検証する。

検証方法としては、煮堅魚・籠堅魚を再現する加工実験を実施する。これとともに、具体的な生産地域を対象として、当該地域沿岸に回遊するカツオの生態に関する情報を収集・分析し、税物生産に使用されるカツオの特性を解明する。情報の収集に際しては、文献史料のみならず、水産研究関連の文献や研究者からの情報収集、およびカツオ製品の加工業者等からの聞き取り調査に重点をおいて行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

#### ①今年度の研究経過

##### 【アワビの発酵品（鮭鮓）】

加工法の調査・研究として、現在のなれ鮓生産に関する民俗調査事例等の文献調査とともに、2019年7月、福井県小浜市にてサバのなれ鮓製造に関する現地調査を実施した。2019年10月には、現在でもなれ鮓を生産している伝統職人から聞き取り等を行い、加工の手順や時期・期間、発酵食材と米・塩の使用比率の情報を収集した。併行して、文献史料・木簡の数量・助数詞を分析し、それらと現在のなれ鮓製造における材料比率との比較検討を行うことで、『延喜式』等に記載される鮭鮓の材料比率を特定した。

この結果、食材と発酵のために必要な米・塩の使用比率については1:1.7程度であること、この数値を『延喜式』にみえる一人あたりの鮭鮓貢納量46斤にあてはめると、材料となるアワビの使用量は17斤程度であることが判明した。この算定数値は、乾燥品の長鮓6斤と発酵品の鮭鮓46斤という両者の貢納量に着目して、税負担の均等性の観点から検証した場合でも、妥当なものと評価できる。すなわち、2018年度までの長鮓加工実験では、乾燥により約26%まで重量が減少することが判明しており、この数値からの逆算によって、長鮓一人分の貢納量に相当する乾燥前のアワビ重量は約22斤と算出することができる。鮭鮓一人分の貢納量に相当するアワビの使用量は約17斤であることから、米・塩の使用量を考慮すると、長鮓と鮭鮓の貢納量は、材料の点では価値的に同等程度であったと考えられるのである。これにより、46斤という鮭鮓一人分の貢納量は、税物の均等負担の原則に基づく適切な数値として設定された可能性が高いことがわかった。

以上の想定を検証するため、割り出した材料比率に基づき、2020年2月より、現在のなれ鮓の製造工程を参考にした加工実験と経過観察を試みている。本研究期間内の経過としては、一ヶ月程度の塩漬け段階まで終了しており、その後は米飯に漬け込んだ発酵の工程に進んでいる。また、食品としての特性を把握するため、加工前後でのアワビの成分分析も実施している。発酵過程も含めた全工程の終了後は、加工実験の結果とともにそのデータを分析し、公開する予定である。

##### 【カツオの乾燥品（煮堅魚、籠堅魚）】

特定地域を対象としたカツオの特性を具体的に把握するため、水産研究関連の文献やカツオの製造業者（株式会社 にんべん研究開発部）から、カツオの回遊に関する研究情報を収集した。これとともに、2019年7月、静岡県水産技術研究所に伺い、煮堅魚・籠堅魚の主要な貢納地域である駿河湾沿岸のカツオの生態についての聞き取り調査を行った。その結果、黒潮から離れた沿岸付近を回遊する一群が存在すること、それらは2kg未満の脂質が少ない未成魚であり、駿河湾沿岸にはそうした群れが回遊する、といった情報を得た。古代のカツオ製品貢納諸国も、当該地のカツオの生態にあわせて加工に適切な漁期や漁場を選択し、製品を生産していた可能性が高い。

加工実験については、まずは過去の煮堅魚・籠堅魚の再現実験事例を精査したところ、実験に使用したカツオの1節あたりの単位重量や形状、脂質や加工時期等に対する条件が考慮されていないこと、乾燥機器を用いない実験では腐敗等の失敗例が多かったことがわかった。この点に関して、本研究における加工実験では、腐敗をさけるため、1節あたり平均約90gといった古代の貢納品重量に考慮しつつ、厚みを抑えた形状での加工に留意することとした。しかし、上記条件である2kg未満の脂質が少ない未成魚は、本実験で実験のための検体の入手を予定していた御前崎の漁港を例とすると、水揚げの時期が3月末～4月初頭の限られた期間となることから、本研究期間内に入手することは不可能であることがわかった。このため、代替措置として、株式会社 にんべん研究開発部が2019年12月から2020年2月に行った煮堅魚・籠堅魚の再現実験に際して、古代の加工に関する諸情報を提供するとともに、重量と厚みに着目した加工をお願いした。

厚さ2cm未満、歩留まりの計算から乾燥品90g程度となる切り身に加工した当該実験では、自然乾燥では腐敗を抑える水分活性値に到達する前に、ほとんどの検体に黴・腐敗が発生した。その原因としては、実験に使用した検体が冷凍した3kg以上の成魚であったこと、想定よりも脂質が多かったこと、乾燥を行った時期が想定される春～夏頃ではなかったこと、実験時の通気環境等が整っていなかったこと、といった問題が考えられる。今後は、2kg未満で低脂質の未成魚を入手した上で、3月末～4月初頭の駿河湾沿岸での気候下といった古代の生産環境に近い条件での加工実験を実施し、実験データの分析・検証を行う必要がある。

#### ②資料調査および研究成果

##### 【資料調査等】

・水産品研究検討会 2019年7月22日 於：東海大学海洋学部

古代のなれ鮓製造およびカツオの乾燥品等の調査において聞き取り調査の対象とする研究者・製造業者についての情報を得るため、東海大学海洋学部の石川智士氏・花森功仁子氏・岡田夕佳氏・武藤文人氏と意見交換を

- 行った。
- ・なれ鮓製造に関する現地調査 2019年7月29・30日 於：御食国若狭おばま食文化館  
なれ鮓製造に関する基礎的情報および現在のなれ鮓製造業者に関する情報収集を行った。
  - ・古代カツオ加工品製造実験に関する打合せ 2019年8月5日 於：株式会社になべん研究開発部  
カツオ加工に関する実験計画についての意見交換を行った。
  - ・カツオ製品加工実験およびカツオの生態に関する現地調査 2019年8月21日 於：静岡県水産技術研究所・志太郡衙資料館  
駿河湾沿岸におけるカツオの生態および過去の煮堅魚再現実験に関する情報の収集を行った。
  - ・なれ鮓製造に関する現地調査 2019年10月21・22日 於：民宿「佐助」・へしこ小屋（福井県小浜市田鳥所在）  
なれ鮓製造職人より、加工手順や材料比率、地域社会における生産実態に関する聞き取り調査を行った。
  - ・カツオ製造実験の打合せ 2020年2月13日 於：国立歴史民俗博物館  
株式会社になべん研究開発部で実行中の煮堅魚・籠堅魚再現実験および古代の加工条件を前提とした実験に関する意見交換を行った。
  - ・アワビのなれ鮓（鮓鮓）加工実験および成分分析 2020年1月30・31日、2月18・25・26日～（継続中） 於：国立歴史民俗博物館  
天然メガイアワビを使用した形状加工・塩漬け処理（1月30・31日）、発酵工程時に使用する稲藁の三つ編み製作（2月18日）、塩抜き・米飯漬け込み・発酵作業（2月25・26日）を行った（発酵過程は本研究期間終了以降も継続）。1月30日段階の塩漬け前のもの、2月25日段階の塩漬け後米飯漬け込み前のものを検体とした成分分析を実施した。分析に際しては、味の素食の文化センター・味の素食品研究所の全面的協力を得た。

#### 【成果発信（記事・展示等含む）】

- 清武雄二、ホヤ 古代若狭の高級食材（北陸歴史よもやま話），読売新聞石川版・富山版，p.26，2019年6月15日  
 清武雄二、古代の税物生産における長鰻一品種・製造法・保存期間の検証実験一，国立歴史民俗博物館研究報告，218，国立歴史民俗博物館，pp.425-444，2019年12月27日（査読有）  
 清武雄二・石川智士、『延喜式』と水産研究—古代の水産食品に関する多分野協働研究，歴史系総合誌「歴博」，219，国立歴史民俗博物館，pp.11-14，2020年3月20日  
 歴博モバイルミュージアム「古代国家とアワビ 『延喜式』にみる生産と貢納」，2019年3月19日～6月9日，於：国立歴史民俗博物館／7月18日～8月18日，於：成田市芸術文化センター／10月20日，於：日本科学未来館

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎清武 雄二 本館研究部・特任助教

### (28) 基盤研究（C） 古墳時代鉄鍬の変化と地域性に関する数理的解析 2017～2019年度 (研究代表者 松木武彦)

#### 1. 目的

古墳時代の量産武器である金属製鍬を、その発達がピークとなる5世紀の資料を中心に、日本列島と朝鮮半島とで広くデータを集成する。集成したデータを最新の数理的手法によって解析し、その年代による変化（時間的変化）と地域色（空間的変異）を、数量的・客観的に図上に明示する。そのことによって、変化や変異の内容と方向性を数量的に正しく認識し、機能や技術の発展過程のほか、「デザイン」としての形態が生み出されるプロセスを復元する。そのプロセスを、これまでの考古学で明らかになっている日本列島と朝鮮半島の国家形成過程と照合することにより、武器がそのデザインを通じて国家や民族の形成に関連したことを実証し、その歴史的メカニズムについてモデルを提示する。

#### 2. 今年度の研究計画

本研究が対象とする5世紀の鉄鍬のうち、もっとも量産されて広く普及し、地質学の「示準化石」にも例えられる「柳葉形鉄鍬」を中心とした一括出土資料の平面図データの収集と楕円フーリエ解析を完了する。また、柳葉形鉄鍬に先行し、その成立に大きな影響を与えた柳葉形銅鍬、および柳葉形鉄鍬とほぼ併行し、その分布や製作背景が異なると考えられる頭圓形鉄鍬についても平面図データを収集と楕円フーリエ解析を完了する。



収集・解析の対象となる資料は、他の出土品の様式などから年代が明確で、なおかつ一度に多量に出土した例で、楕円フーリエ解析に耐えるほど良好に外形が残存しているものとする。柳葉形銅鏃は、奈良県メスリ山古墳出土の約100点を中心に350点程度、圭頭形鉄鏃は、主な分布域である九州を中心に約500点程度である。

楕円フーリエ解析によって、これらの輪郭全体の形状を数量化し、それを主成分分析と組み合わせることで、研究者が特定の特徴を選択することなしに、「変異幅が大きい」形態的特徴を主成分として抽出する。このことによって、各型式の時間的変化と空間的変異を数量的に可視化し、歴史学と進化科学の両面からその要因を検討する。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

第1回の会合として、2019年5月18日に全員が国立歴史民俗博物館に集まり、研究分担者の田村を中心として行った柳葉形鉄鏃の楕円フーリエ解析の結果を検討した。各資料の時間的序列を検討するために、出土した古墳の編年を橋本が整理し、解析成果をそれに上乘せる粗作業を行った。

第2回の会合は、韓国における柳葉形鉄鏃のデータの取得と合わせて実施した。9月19日に韓国・務安を經由して羅州に到着し、20日に国立羅州文化財研究所に赴き、高興野幕古墳の出土鉄鏃を調査した。21日は光州の大韓文化財研究院にて和順懷徳3号墳の出土遺物を調査したのち、22日に務安より帰国した。

第3回の会合は、1月24日に九州大学博多駅オフィスで行い、研究成果をまとめた。翌25日には、その総合的成果を「南山大学人類学研究所「形の理」第2回シンポジウム「人工物の三次元計測と幾何学的形態測定の実践と実践にて」において、『「型式学」の脱構造化—古墳時代の鏃を対象とした提言—』として松木が報告した。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎松木 武彦 本館研究部・教授  
 田村 光平 東北大学学際科学フロンティア研究所・助教  
 中尾 央 南山大学人文学部・准教授  
 橋本 達也 鹿児島大学総合研究博物館・教授

#### 【研究協力者】

高田 貫太 本館研究部・准教授  
 野下 浩司 九州大学理学部・助教

## (29) 基盤研究（C） 1930～1960年代における化粧文化の実態 2017～2019年度 （研究代表者 青木隆浩）

### 1. 目的

本研究課題は、おもに1930年代から1960年代にかけての化粧文化について、その実態を探るものである。大正時代までの日本では、洗顔と水性のバニシングクリームによるスキンケアをした後に、薄く白粉を塗るのが日常の一般的な化粧法であった。ところが、大正末期にハリウッド映画が人気を博し、昭和初期からアメリカ映画女優のメイクをまねたモダンガールが出現すると、都市部を中心に少しずつメイクが普及していった。

ただし、その流行期間は短く、第二次世界大戦による「ぜいたくは敵だ」というスローガンや化粧品に対する高額な物品税の導入などにより、メイクの流行は去っていった。本研究課題は、その背景にある社会的・経済的条件とそれらによって変化していった化粧に対する道徳観・価値観の変化を取り上げ、さらに戦時・戦後期に化粧離れが進んだ後、1960年代に再び化粧が人々の生活に定着する様子を明らかにするものである。

### 2. 今年度の研究計画

まずは、株式会社コーセーから借用している第二次世界大戦前後の業界紙・業界雑誌の写真撮影をして整理した後、それらをデータベース化する。分量が、大きな段ボール箱で約10箱分と大量にあるので、効率よく作業を進めるため、データ化する項目を発行年月日や巻号、主要な見出しタイトルなどにできるだけ限定して、リスト化する。

次に資生堂の『資生堂月報』や『資生堂グラフ』、カネボウ化粧品の『QUEEN』や『BELL』、コーセーの『カトレア』、『BEAUTY』などの企業PR誌などの企業PR誌を撮影し、その写真データを整理する。なお、本研究課題が対象とする期間は、これらの企業PR誌が発行されていた時期に較べるとかなり短いですが、当時の歴史的な位置づけをするには、その前後の数十年間にわたる誌面分析が必要である。現時点において、『花椿』の撮影はほ

は終えている。その後、業界紙や業界雑誌と同様に発行年月日や巻号、主要な見出しタイトル、表紙のモデルやイラストの作家などをデータ化する。

さらに、第二次世界大戦前後にかけて大手・準大手であった企業に関する資料の発掘を進めていく。とくに中山太陽堂（商標：クラブ）、平尾賛平商店（商標：レート）、久保政吉商店（商標：ウテナ）、伊東胡蝶園（商標：パピリオ）、丸見屋商店（商標：ミツワ）、長瀬商会（商標：花王）、小林商店（商標：ライオン）などの資料収集に重点を置く。現時点では中山太陽堂が『中山太陽堂月報』や『ビューティ』、平尾賛平商店が『レート通信』を発行していたことを把握しており、それらのごく一部を現物や画像で所有している。

また、クラブコスメチックスの文化資料室や資生堂企業資料館、紅ミュージアムなど、企業資料館の企画展示は参考になるものが多いので、できるだけ見学していく。加えて、化粧品の業界団体である日本粧業会で公開している資料の閲覧と分析を進める。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

まず、株式会社コーセーから借用しているPR誌『カトレア』、『BEAUTY』、『beauty profile』、『PRECIOUS BEAUTY』のほか、『週刊粧業』や『日本商業』、『東京商報』、『東京小売商報』といった業界紙については写真撮影を終えた。PR誌については、リスト化も進めていった。

また、商品や企業PR誌を含む広告類の現物については、できるだけ積極的に収集した。それらには、素材の質感や機能性、成分、能書、季節性、多言語対応、広告の狙い、重要なキーワード、モデルのプロフィールなど、業界紙、業界誌、社史ではあまり紹介されていない情報が多分に含まれている。例えば、昭和10年代後半に入ってから物品税の高騰とそれに伴う化粧品の国内市場縮小により、海外市場への進出を意識した商品パッケージの多言語化が進んでいたことなどは、今回の資料収集ではじめてわかったことである。

資料収集とその分析結果は、おもに国立歴史民俗博物館の特集展示「石鹸・化粧品の近現代史」（2019年12月3日～2020年5月6日、当初予定）に反映させた。展示の内容は、第Ⅰ期（12月3日～1月26日）を明治・大正時代中心とし、第Ⅱ期（1月28日～3月22日）を第二次世界大戦前後に重点を置いた。第Ⅲ期は3月24日～5月6日までの開催を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で延期となった。マスクミヤSNSでの反響が高かっただけに残念である。その後、この特集展示は6月30日～8月30日まで開催されることになった。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎青木 隆浩 本館研究部・准教授

## (30) 基盤研究（C）

### 帝国日本と植民地災害

#### —日本植民地時代の台湾震災史を中心に—

#### 2017～2019年度

（研究代表者 荒川章二）

#### 1. 目的

本研究は、日本植民地時代の台湾における震災史の全容を明らかにすることで、植民地での災害とそれに対する植民地権力・本国の対応という分析視角から、一般に内国史的な色彩が強い災害史と日本植民地史（帝国史）、総力戦体制への過程史を接合し、総体としての歴史的意味を問うことにより、それぞれの分野の研究に一石を投じることを目的とする。初期の植民地統治期においては、災害という非常時への対応は、支配の安定・定着に関わる局面であり、国際社会が制度的に形成された第一次世界大戦以降においては、植民地の大地震は、国際的救援・関心を呼び込む広義の外交・国際関係に関わる事態でもあり、本国と植民地が一体となった救済・復興の演出は、総力戦準備の基盤形成にもつながった。以上の諸側面に注目し、災害史像の再構築を試みる。

#### 2. 今年度の研究計画

最終年度の第3年目である本年度は、以下の点に留意して資料調査を進める。

- 1) 前年度に引き続き、『台湾日日新報』および『朝日新聞外地版(台湾版)』の記事検索を中心として、1895年(明治28)～1941年(昭和16)までの震災記事を全て拾い出し(1941年12月の震災関連記事は翌42年まで継続)、台湾での歴史的震災に関する記事を詳細に掘り起こす作業を完了させる。

また、明治期の『台湾協会会報』(月刊)についても、各号掲載の「雑報」情報を中心に検索を行う。

- 2) 台湾震災に関する台湾内での義援金募集は震災の救済においてだけでなく、支配と民衆の関係、民衆同士の関係両面で重要な意味を持ち、かつ、台湾震災に対する本土の義援金募集、関東大震災など本土の震災や災害に対する台湾民衆の動員体制も整えられる。調査では、震災毎の皇室による救恤実施の有無とともに、総督府行政や台湾の新聞社によって展開された各地震への義捐金募集運動の展開に注目する。
- 3) 国立歴史民俗博物館では、平成28年度に戦前の戦時総動員業務の中枢機関であった企画院・軍需省、および戦時地方行政に関わり、その経験と所蔵資料を活かして全13巻の大著『国家総動員史』をまとめあげた石川準吉に関する5700点に及ぶ資料群を、研究代表者が責任者となって受入れた。戦後の石川は、行政監察行政に携わり、伊勢湾台風後の災害対策基本法制定に関与し、災害報告書および法の制定過程を追及できる資料が含まれるが、災害対策立法への関与を通じて、戦時総動員経験と災害対策との関係をつなぐ問題意識が、非常大権の権力行使の是認等として確認できる。アジア規模での総力戦推進の行政体験が戦後の防災行政にどうつながるかを考察できる資料群でもある。2018年度に資料の整備が完了し、2019年度に1950～70年代の防災基本法制定過程、伊勢湾台風対応、災害調査資料など150点ほどの簿冊に関する内容的チェックを行い、本研究にとっての有用性の観点から仕分けを行なった。本年度は選定した戦後の災害対策に関する資料を読み込んでいく作業を行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

- 1) の震災関係記事については、主として国立国会図書館の新聞資料室にて、昨年度分および本年度をあわせ、1500項目ほどの記事を拾いだした。これらの検索結果によれば、植民地期台湾での震災は、1901年、1903年、1904年、1906年、1909年、1913年、1916年、1917年、1920年、1922年、1927年、1930年、1931年、1935年、1936年、1941年と頻発しており、時期別・地震別の被害・救援、恩賜金（救恤金）・勅使（侍従）の派遣の有無、地域別集中度、東西・南北の震災の相違、余震の頻度、流言の状況、慰霊祭、日本から派遣された地震学者の調査とその役割（談話、講演、台湾の震災の分析、家屋構造）、測候所の役割、などいくつかの側面が明らかになりつつある。今後、これらの記事分析とすでに収集済みのいくつかの文献と合わせて詳細な検討・分析を進めたい。
- 2) 各震災での義援金募集の経緯については、詳細な新聞検索により、「領収報告」掲載の応募者名を含めて、時代毎の展開過程が明らかになり、同時に検索した関東大震災に対する台湾側からの義援金募集活動（個人名記載）を合わせることで、明治期以来、日本国内において頻繁に繰り返された災害義援金募集活動の社会的意味を、植民地支配を含めて考察することが可能になった。  
なお、台湾近代史に関わる別のプロジェクトとの関係で、台湾からの留学者が多かった早稲田大学において、1935年4月の台湾震災に対する教員・学生ぐるみの義援金募集活動が展開されたことも判明した（募金活動の簿冊）。この成果は、本館と国立台湾歴史博物館・国立成功大学（台南市）が共催した国際ワークショップ「近代東アジアの体育世界と身体」（於：国立成功大学、2019年8月4日～6日）において報告した（荒川「早稲田大学と張星賢」）。
- 3) 本年度の課題の一つとした本館所蔵石川資料の分析については、本年度末からの異常事態の関係で、2～3月に予定していた調査計画が全て不可能となり、目標を果たせなかった。科学研究費の研究期間は終了したが、引き続き課題としたい。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎荒川 章二 本館・名誉教授

## (31) 基盤研究（C） 朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史 2016～2019年度 （研究代表者 高田貫太）

### 1. 目的

朝鮮半島西南部における三国時代遺跡の調査・研究成果に基づき、5世紀後半から6世紀前半頃に当地域に造営された前方後円墳を、当地域に根拠を置いた政治勢力たる馬韓（榮山江流域）の観点から歴史的に位置づける。それによって、これまで倭や百済の立場が強調されがちであった前方後円墳の造営をめぐる、倭と馬韓との交流史を再構築する。特に、以下のa～dの課題に取り組む。

- a. 半島西南部の集落・墳墓資料の集成・分析作業から当地域に位置した馬韓社会の構造を明らかにする。
- b. 半島西南部の外来系資料（前方後円墳を含める）の系譜を再整理し、馬韓の対外関係を明らかにする。
- c. a・bの成果から馬韓社会における前方後円墳造営集団の役割や性格を明らかにする。
- d. a～cの成果を総合化し、前方後円墳造営をめぐる馬韓と倭の政治経済的な交流関係を再構築する。

## 2. 今年度の研究計画

前年度に検討した馬韓社会の構造や対外関係の実態に基づいて研究視点を前方後円墳に移し、その造営をめぐる倭と馬韓の交流史を描く。

- ① 前方後円墳造営集団の性格についての研究：半島西南部における拠点集落や在系墳墓（方台形墳）と前方後円墳の関係を、地勢的な位置、交通路との関わり、墳墓を構成する諸属性の共通点と違いなどの視点から、検討する。そのことによって、馬韓社会の中で前方後円墳造営集団がどのような社会的な位置にあったのかについて明らかにする。
- ② 前方後円墳造営をめぐる倭と馬韓の交流史を描く：これまで研究を進めた馬韓社会の構造や対外関係（2018年度①・②）、そして前方後円墳造営集団の性格を総合化することで、倭と馬韓のどのような交流関係の中で、半島西南部に前方後円墳が築かれたのかについて考察する。その際に、百済と馬韓の関係や筆者が整理した日本列島における半島西南部系の考古資料の様相なども包括し、当時の「双方向的」、「多角的」な日朝関係に注意を払いつつも、特に馬韓社会の主体的な対外関係の中で前方後円墳を再評価したい。それによって、これまでとかく百済と倭の政治的関係の視点から、あるいは過度に馬韓社会の内的要因を重視する視点から解釈されてきた研究動向の相対化を図る。
- ③ 調査・研究会・成果公開：大韓文化財研究院の発掘調査に参加し、最新の調査動向を把握する。また、韓国での研究会以外に、年度末に国際シンポジウムを開催し、本研究の総括をはかる。その総括内容と連携研究者や研究協力者による論文をまとめて、それを成果として公開する。

## 3. 今年度の研究経過

今年度は、研究会と資料調査をあわせて行った。韓国において2回、歴博にて1回実施している。

第1回目は、2019年8月7日～10日にかけて行った。韓国国立光州博物館にて、咸平新徳1号墳出土副葬品の調査を実施した。第2回目は、2019年10月9日～14日にかけて行った。ひきつづいて咸平新徳1号墳出土副葬品の調査を実施するとともに、全羅道高敞・霊光地域の三国時代墳墓を踏査した。第3回目は、2019年12月27、28日に歴博にて行った。リニューアルされた総合展示室第1室の展示を調査し、特にその中の朝鮮半島の前方後円墳をあつかう部分について討議した。

## 4. 今年度の研究成果

最終年度にあたる今年度の特筆すべき成果としては、研究代表者の高田が、朝鮮半島の前方後円墳に関する書籍（高田貫太『異形の古墳 朝鮮半島の前方後円墳』2019、角川選書）を刊行することができた点である。科学研究費による研究内容に基づいて、以下の①～③の内容を盛り込んでいる。

- ① 前方後円墳出現以前の弥生時代から5世紀後半までの倭と栄山江流域（≒馬韓）の交流史を考古学的にまとめた。
- ② 栄山江流域各地の前方後円墳の地勢と周辺の墳墓や集落遺跡の動態を明らかにした。
- ③ 栄山江流域社会の実態と前方後円墳造営の歴史背景について、検討した。

その中で、前方後円墳をきずく集団と在地系の高塚古墳をきずく集団が「排他的」というよりは、協調や対立をふくみこんだ「並列的」な関係であることをより実感することができている。

もうひとつの成果は、副葬品の内容が良好に遺存している前方後円墳、咸平新徳1号墳の副葬品の調査を、国立光州博物館、大韓文化財研究院、そして歴博の3機関、日韓共同で実施したことである。2019年11月8・9日に国立光州博物館において開催された「咸平礼德里古墳群史蹟指定推進のための国際学術会議」において、その成果の一部を高田、諫早などが発表した。今後、国立光州博物館において発掘調査報告書が刊行される予定である。年度末には、研究の内容を総括する国際シンポジウムを開催する予定であったが、コロナ禍によって果たせなかった。ただし、その一部は、大韓文化財研究院などが開催を予定している栄山江流域社会の中の咸平地域に関するシンポジウム要旨集に、反映させることができた。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎高田 貫太 本館研究部・准教授

## 【連携研究者】

廣瀬 覚 奈良文化財研究所  
諫早 直人 京都府立大学

## 【研究協力者】

李 暎澈 韓国大韓文化財研究院  
金 洛中 韓国全北大学校

(32) 若手研究 (A)  
東北日本における過去3400年間の酸素同位体比標準年輪曲線の確立  
2017～2020年度  
(研究代表者 箱崎真隆)

## 1. 目的

酸素同位体比年輪年代法は、2010年代に日本で急速な発展を遂げ、木質遺物の高精度年代測定の実用範囲を大きく広げた。同法は、従来の年輪幅の年輪年代法では適用が難しかった広葉樹材にも誤差0年の年代決定の道を拓き、先史時代～古代の木質遺物の年代決定に大きく貢献しつつある。しかし、同法は従来法と同様に、気候場の異なる地域ごとに「標準年輪曲線（年代測定のものさし）」を必要とする。研究代表者は、主に東北日本産の木材を使って、その整備を進め、西暦417年～1595年にわたる東北日本版酸素同位体比標準年輪曲線を構築した。本研究の目的は、これを3400年前まで空白なく拡張し、東北日本における同法の基盤を確固たるものとするところである。

## 2. 今年度の研究計画

今年度は、前年度までに得られた青森ヒバ（ヒノキアスナロ）現生木、東京都愛宕下遺跡出土材、宮城県仙台市中在家南遺跡出土材の分析を進め、データの空白を埋めることを計画した。また、酸素同位体比年輪年代法と東北日本版標準年輪曲線の有用性を認知してもらうため、研究成果に基づく論文執筆、学会発表、展示制作等を計画した。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

高樹齢の青森ヒバ現生木の酸素同位体比分析を進め、過去300年のデータを獲得した。また、前年度に続いて東京都愛宕下遺跡出土材の分析を進め、15～17世紀の酸素同位体比データを得た。データを追加することで高精度気候復元にも活用できる質の高い標準年輪曲線が構築できた。宮城県仙台市中在家南遺跡出土材の分析を進めた結果、これまで東北地方太平洋側では空白であった紀元前1-紀元2世紀のデータが得られた。これに加えて、福島大学木村勝彦教授とのデータ共有により佐渡島各地の遺跡出土材データが得られ、東北日本の過去3400年間におけるデータ空白はほぼ無くなった。

応用研究として、本研究で年代確定した青森ヒバ試料を用いた1年輪単位の炭素14分析を実施した。その結果、西暦774～775年と西暦993～994年の炭素14濃度急増イベントを再現できた。また、太陽活動極小期のひとつ「シュペラー極小期」の炭素14濃度変動を復元することもできた。これらの成果は国際会議や国際誌にて公表した。

国立歴史民俗博物館の事業の一環として、モバイル型展示ユニット「日本で生まれた新しい年代測定法『酸素同位体比年輪年代法』」を製作し、これまでの成果を広く外部に発信する媒体を得た。この展示ユニットは次年度以降、全国各地の教育施設等で活用される予定である。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎箱崎 真隆 本館研究部・特任助教

(33) 若手研究  
幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成  
2018～2021年度  
(研究代表者 天野真志)

## 1. 目的

本研究では、近世以来多様な学問体系を受容し、複合的な文化的空間を形成した出羽国秋田藩角館地域を対象に、①平田国学流入以前の文化的特質の形成、②平田国学と角館地域との対峙、③平田国学との関係を通じた政治意識

の形成を検討する。これまで国学思想の政治的役割についてはその具体像を提示するに至っていないが、本研究では秋田藩角館地域を対象としたモデルケースとして、平田国学との関係を通じた政治意識の具体相を提示し、近代国家形成過程における文化・思想の政治的意義を再検討することを目指す。

## 2. 今年度の研究計画

角館町武家屋敷群内の石黒家を対象として、同家所蔵文書の調査をとおして、近世後期から幕末維新期における交流関係の実態を分析し、当該地域の交流関係とその変遷過程を検討する。

さらに、角館武家屋敷群を中心に伝来文書の調査をおこなうとともに、秋田県公文書館所蔵「佐竹北家文書」および「吉成文庫」など、町外に分散した文書群の所在情報を調査し、近世後期以降の北家家臣団の基礎構造を把握することを目指す。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

前年度に引き続き角館町武家屋敷内の石黒家文書の調査・整理を実施するとともに、角館地域における学問的関係の構築状況に加え、由緒調査から派生する他地域との交流関係の把握を進めた。あわせて、石黒家文書の保存に関する協議を進め、同家における長期保存に向けた処置を進めることができた。

これらの成果を踏まえ、東北史学会大会で「幕末期の気吹舎情報をめぐる政治・思想関係」として研究発表をおこない、秋田藩内における政治情報流通と思想的関係について議論をおこなった。

また、石黒家以外の資料所蔵宅へも所在確認と一時調査をおこない、今後の調査・研究に向けた関係を構築するとともに、佐竹家中の歴史意識と関連した由緒探求の実相について、茨城県立歴史館発行の特別展図録『佐竹氏—800年の歴史と文化』に寄稿し、角館地域から発する知的関係の展開状況を提示した。

さらに、国立歴史民俗博物館所蔵「平田篤胤関係資料」から気吹舎平田家と秋田藩との交流に関わる情報の抽出をおこない、篤胤生前から構築される両者の関係性について、思想的側面に限定されない交流関係について検討をおこなった。あわせて、秋田県公文書館所蔵「佐竹宗家文書」、「佐竹北家文書」「吉成文庫」を中心に角館および気吹舎関係資料の調査を実施し、秋田領内で形成されていく交流関係の実態解明に向けた検討をおこなった。

これらの成果を踏まえ、成果発信に向けた情報整理をおこない、成果の論文化・史料紹介に向けた史料翻刻と検討を進めることができた。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎天野 真志 本館研究部・特任准教授

### (34) 若手研究

#### クラウドソーシングと機械学習を統合した歴史資料翻刻システムの開発 2018～2019年度

（研究代表者 橋本雄太）

##### 1. 目的

本研究の目的は、クラウドソーシングによる人海戦術と機械による自動認識を統合することで、膨大な点数が残されている日本語の歴史文献資料を効率的にテキスト化（翻刻）する手法を開発することである。現代人には解読困難な「くずし字」で書かれた江戸時代以前の日本語資料の翻刻は、これまで少数の専門家の手になんてなされてきたが、クラウドソーシングと機械学習技術の発展にともない、数十万点の資料の全文翻刻の実現が現実味を帯びつつある。本研究では、まず①再帰型ニューラルネットワークを利用し文脈判断に対応した「くずし字」認識技術を開発するとともに②機械認識と人間の作業者が協調する翻刻支援システムを構築する。さらに③このシステムを歴史災害資料のクラウドソーシング翻刻システム『みんなで翻刻』に実装することで評価実験を行う。これらの課題の達成を通じて、日本語歴史文献資料の全文翻刻のための道筋をつける。

##### 2. 今年度の研究計画

今年度は「くずし字」の自動認識のための学習モデル構築の準備作業にあたる。これと並行して、機械認識と人間の作業者が協調する翻刻システムの開発にあたる。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

AIによる自動認識機能を備えた『みんなで翻刻』の新バージョンを完成させ、2019年7月に公開した（研究成果5）。このバージョンには共同研究を進めている2団体から提供を受けた2種類のくずし字認識エンジンが搭載されている。ひとつは人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）により提供を受けたもの、いまひとつは凸版印刷株式会社から提供を受けたものである。新バージョンでは2020年3月までに800名以上の参加を集め、すでに260万文字以上の近世史料が翻刻されている。この成果を通じて、AIによる支援が市民参加型翻刻の効率化に有効にはたらくことを示すことができた。

#### 【査読付き国内学会発表】

1. 橋本雄太, 宮川真弥「日本語文献史料の構造化記述のための軽量マークアップ言語の開発」人文科学とコンピュータシンポジウム2018, 2018年12月1日, 東京大学地震研究所

#### 【査読付き国際学会発表】

2. Yuta Hashimoto, et al.: "Minna De Honkoku : Learning-Driven Crowdsourced Transcription of Pre-Modern Japanese Earthquake Records", Digital Humanities 2018, June 2018, Mexico City.
3. Yuta Hashimoto and Yasuyuki Kano : "The Role of Academic Institutions in Supporting Citizen Science : A Historical Seismology Case Study", 7th International Conference on Data Science and Institutional Research (DSIR 2018), July 2018, Yonago City.
4. Yuta Hashimoto : "A Markdown Approach for the Diffusion of TEI Usage in Classical Japanese Studies", the 18th annual Conference and Members Meeting of the Text Encoding Initiative Consortium (TEI), September 2018, Tokyo.
5. Yuta Hashimoto, "Honkoku 2 : Towards a Large-scale Transcription of Pre-modern Japanese Manuscripts" The 9th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2019), August 29, 2019.

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎橋本 雄太 本館研究部・テニュアトラック助教

## (35) 若手研究 日中戦争期華中における占領地統治の進展と現地秩序の改変過程 2018～2020年度 (研究代表者 吉井文美)

### 1. 目的

本研究は、日中戦争期の華中を対象に、日本の中国支配の拡大とともに、現地を支配する主体が「正当な政府」（中華民国）から、日本が設立した「事実上の政府」（維新政府・汪兆銘政権）へと移行する過程において、在来の国内法・国際法に加えられた変化と、その変化が惹起した国際的影響について、明らかにするものである。これによって、宣戦布告を行わずに「事実上の政府」による占領地支配を行うという方法をとった、日中戦争の占領地支配上の特質に迫る。

### 2. 今年度の研究計画

今年度は、維新政府（1938～40年）から汪兆銘政権（1940～45年）への移行期を対象に、日本による中国支配の進展が、伝統的にイギリスと密な関係を築いてきた国民政府組織である海関に対してもたらした影響について検討する。アメリカと台湾で関連する資料の調査を行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、海関行政のトップを務めるイギリス人総税務司が、成立直後の汪兆銘政権との関係をどのように築いたのかや、1941年11月の江海関税務司（上海税関長）への日本人税務司就任をめぐる日本と海関がどのような攻防を展開したのかについて明らかにした。日本側については外務省・陸軍省・興亜院の史料、海関側についてはメーゾ総税務司の史料などを用いたほか、イギリスやアメリカの外交文書なども利用し、実証的な考察を行った。今年度の研究成果としては、アメリカで研究報告を行い、アジアを研究対象とする多国籍の研究者から有益な助言を得ることができた。これにより来年度の研究の方向性を決めることができた。また、前年度明らかにした維新政

府期の海関人事問題と併せて論文を執筆し、査読付きの学術雑誌への掲載が決定した。

#### 【口頭発表】

・吉井文美「日中戦争期における海関人事をめぐる攻防」（名古屋大学経済学部・経済学研究科 課題設定型ワークショップ 社会経済研究）2019年11月、名古屋大学

・Fumi Yoshii, Japan's Undeclared War : International Society and Japan's 1930s China Policy, Japan History Lecture, Council on East Asian Studies, Feb. 2020, Yale University, USA.

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎吉井 文美 本館研究部・准教授

### (36) 特別研究員奨励費 説話伝承と地域文化に関する研究—東海地域における疫神信仰の形成と展開 2018～2020年度 (研究代表者 松山由布子)

#### 1. 目的

在地に伝えられる宗教説話について、説話を伝える地域社会との関係に注目しつつ、その文芸的特色を明らかにする。研究対象は、東海地域に伝えられる「祭文」などの儀礼詞章である。特に牛頭天王や八王子など、行疫神を祀る儀礼詞章に内在する宗教説話について取り上げる。説話の物語構造やモチーフを、儀礼を司る宗教者（太夫）の所持した知識や伝承地域の信仰・民俗・歴史との影響関係を踏まえて分析し、物語内容の思想上の普遍性や地域文化に適合した伝承性などを捉える。またこのことを通して、宗教説話の民俗文化における役割、東海地域の地域文化の独自性、物語文芸としての説話の文化的普遍性を探究する。

#### 2. 今年度の研究計画

前年度より行っている宗教文献の書誌調査を継続しながら、調査記録の文献研究を進展させる。民俗信仰に関わる儀礼詞章が多く伝えられる奥三河を中心に、各宗教文献の書誌情報（体裁・分量・丁数・奥書・識語など）を採録し、画像データ・翻刻データを作成する。これらの資料をもとに、各文献の伝来や継承の経緯、在地における宗教知識の受容・利用の史的様相を解明する。その上で、祭文の内容や、そこに内在する説話についての分析を行う。また、国立歴史民俗博物館所蔵「奈良暦師吉川家旧蔵資料」の祭文についても分析し、東海地域の事例との比較検討を行う。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

愛知県北設楽郡東栄町において、在地の民俗信仰を担った太夫の家に伝えられる文献の書誌調査を行った。特に布川地区の太夫家にて、儀礼修法の切紙、大事の書付け、花祭りで用いられた詞章のほか、護符の版木、易道の免許状などを確認した。

また、前年度に発行した豊根村教育委員会管理の宗教文献目録をもとに、祭文の説話研究を行った。特に山内地区に伝えられる『御歳徳神祭文』について、2点の写本を翻刻し、行疫神に対する信仰の特徴や本文表現の文芸性などについて報告した（「在地における祭文の創造—愛知県北設楽郡豊根村山内地区『御歳徳神祭文』の解題と翻刻」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集）。

さらに、国立歴史民俗博物館にて管理される「奈良暦師吉川家旧蔵資料」のうち、『大土公神祭文』などの地霊鎮めの祭文について分析を行った。その内容は日本宗教学会第78回学術大会および日本民俗学会第71回年会にて報告した。この成果は今後、東海地域の祭文との比較研究へと展開させる予定である。

加えて、本研究の主要テーマである「説話伝承と地域文化」について、これまでの説話研究の展開をふまえ、その学際的な位相に対する見解を報告した。特に祭文の説話研究では、その内容の文学的系譜の分析と実際の儀礼の思想的役割の分析を通して、祭文に内在する多層的・多義的な信仰を明らかにしていく必要があることを示した（「祭文研究の方法—説話・伝承研究の視座をもとに」名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター『HERITEX』vol.3）。



## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎松山由布子 本館研究部・外来研究員

## [その他の外部資金]

## (37) 受託研究

冠婚葬祭総合研究所「家族・地域を含めた新たな「つながり」への展望と葬送墓制—死の文化の変容と多元化する社会的紐帯の考察」

(研究代表者 山田慎也)

## 1. 目的

この研究では、現代における葬儀や墓などの死者儀礼の営みを通して、変容する家族や地域社会の実態と今後の展望について考察することを目的としている。

急速に変わっていく葬送墓制において、従来の先祖観とは異なる家族意識や地域社会の新たな絆、血縁を超えた死者と生者の関係性の構築など、さまざまに模索する様子を見ることが出来る。こうした葬送儀礼をとりまく人々の営みから、家族や社会の新たな絆の形成を考察し、今後の展望について検討する。

その際、新たな時代において必要とされているものを捉える上でも、現在の事態に至る歴史的経緯を踏まえて検討していくことが必要であり、総合的に検討することで、研究成果の社会的な還元を図っていきたい。また大学院博士課程など若手研究者も交えてプロジェクトを推進することで、儀礼文化研究の発展、育成も意図している。

## 2. 今年度の研究計画

従来、葬送儀礼は家を中心にして地域共同体が担ってきた。都市部においては核家族化が進んでも、従来の家を基盤とした形態の葬送墓制を最近まで続けているが、少子高齢化の進展は、単身世帯なども増加してさらなる個人化を招き、時には葬送儀礼の執行自体が難しくなっているケースも生じてきている。いっぽう、高齢化、単身化が進むなかで経済的に恵まれない人々も増加している。

そこで今年度は、近親者がいない、もしくはいたとしても何らかの事情で頼ることができない人、さらに生活に窮乏して葬儀を行うことが困難な人も増加している。このような人々の支援について、行政や民間団体などの具体的な支援体制の調査を行う。

## 3. 今年度の研究経過

近年の孤立死の増加や引き取り手のない遺骨の増加など、従来の家や家族を中心としたあり方と行政の例外的な対処では、社会的に対応し切れなくなってきたことがあり、こうした点に踏み込んで、行政が積極的に対応するケースも出てきている。そこで、積極的な対応を行ってきた横須賀市の事例と、精神病院における助葬事業を取り上げて検討を行った。

横須賀市では、近親者のいない単身で経済的に困窮している高齢者が、終末期や死後の対応についての本人の意思を実現するための事業である「エンディングプラン・サポート事業」について調査を行い、それを利用した人々の経過について検討を行った。

このような近親者なき人が抱える諸問題は、一般の高齢者だけでなく、長期の精神疾患患者の場合も同様である。精神疾患患者の場合、近年の問題が浮上する以前からじつは立ち現れていた課題であり、同様の問題に取り組んでいる公益社団法人前橋積善会の厩橋病院についての調査を行った。

## 4. 今年度の研究成果

日本社会の高齢化、単身化が進むとともに経済的に恵まれない人々も増加しているなかで、葬送儀礼の執行も苦慮する人々に対する支援について検討した。とくに看取りから葬送への一貫したサポートを行っている神奈川県横須賀市の事例と、精神疾患患者の助葬事業を行っている前橋積善会の事例を通して、死の前後の一連のサポートの必要性とそこで形成されるつながりの様相を明らかにしていった。

横須賀市の場合には、エンディングプラン・サポート事業が開始され、地元冠婚葬祭互助会など葬儀業者が協力して、それぞれの立場で補完しながら契約者の意思を全うする仕組みを作り出している。そして、具体的事例の検討を通して、時には契約の解約もみられるが、それが必ずしも失敗と断定することができない事例もあり、つながりの構築においては契約のプロセスが重要であることが判明した。

さらに前橋積善会の事例では、精神疾患患者の場合、一般高齢者の孤立問題が浮上する以前から、親族等のつながりが疎遠になる場合が多く、問題はすでに浮上しており、そこで助葬事業を開始することでその不安に応えるようになったという。これらの事例を通して、多様な社会的つながりの構築をサポートする仕組みが必要であることが改めて確認された。

#### 5. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎山田 慎也	本館研究部・教授	鈴木 岩弓	東北大学・総長特命教授
森 謙二	茨城キリスト教大学・名誉教授	小谷みどり	身延山大学・客員教授
土居 浩	ものづくり大学・教授	田中 大介	東京大学・研究員
玉川 貴子	名古屋学院大学・准教授	宮澤 安紀	筑波大学・博士課程
問芝 志保	日本学術振興会・特別研究員	大場 あや	大正大学・博士課程

### (38) 産学連携共同研究 清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究（花王株式会社） 2017～2020年度 (研究代表者 関沢まゆみ)

#### 1. 目的

本研究の目的は、日本列島における「清潔」と「洗浄」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことである。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は、2000年前後までさかに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行い、「清潔」という文化全体を学際的にとらえていこうとするものである。

#### 2. 研究組織 (◎は研究代表者)

久留島 浩	本館・館長	西谷 大	本館研究部・副館長
大久保純一	本館研究部・教授	後藤 真	本館研究部・准教授
樋浦 郷子	本館研究部・准教授	橋本 雄太	本館研究部・助教
桑原 祐子	奈良学園大学・教授	鏡味 治也	金沢大学・教授
金子 正徳	人間文化研究機構・特任助教	津田 浩司	東京大学・准教授
原 正一郎	京都大学・教授	岩淵 令治	学習院女子大学・教授
ウルスラ・フレイ	京都大学・研究員		
武馬 吉則	花王・エグゼクティブ・フェロー	中村 純二	花王・感覚科学研究所・室長
原水 聡史	花王・感覚科学研究所・グループリーダー	門地 里絵	花王・感覚科学研究所
◎関沢まゆみ	本館研究部・教授		